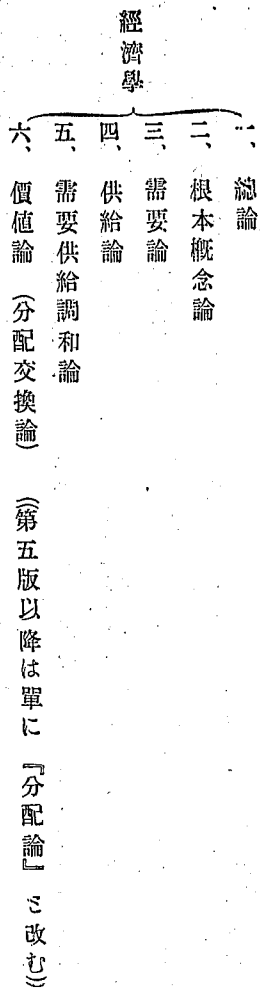


第三編 欲望と其充足 (需要論)

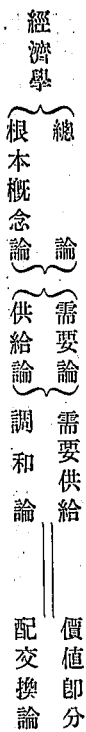
第一章 緒論

從來の通説に依れば、經濟學は富の生産分配交換消費を論ずる學を云ふと爲せり。然るに近來研究の進歩するに従ひ此四者の中分配と交換とは甚だ密接の關係ありて之を二箇の別々なる部門に分つて講究するは當を得ざること認めらるゝに至れり。故に『國民經濟講話』に於ては之を流通の目に統一して考察す。之に反して需要と供給との關係に關する研究は價值に關する實際問題の根柢にして經濟學の講究は先づ此問題を中心とす可きものなるを明白となれり。而して此根本の研究を更らに具體的に布演するものは分配及交換の問題にして需要供給論は分配交換論の準備と看做して差支なきなり。故に本書に於ては此二者を以て説明の二要點と爲す。即ち本書第五編には『需要供給の一般原理』を論じ第

六編に至て『分配交換即價值論』を試みて終結を告げんす。是れマ氏獨得の結構に成り、從來の部門に關する舊套を全く打破せんとするものにして、慥かに一大進歩を認め可きものなり。新學派たる獨逸の歴史學派も其總論に於ては舊慣を捨て、全然新結構に成る論述を試むれども、本論に入りては名稱の上に於て多少の出入する所あるに過ぎず、其内容に至ては、生産分配交換及消費なる分類法を改むることなく、殊にロツシアの如きは、全然舊套を墨守して、毫も新説を出すことなし。シュモラーの如き最新學者に至りても、其原論は該博豐富なり、雖も其は從來經濟原論に屬せざりし、倫理心理社會歴史法制史等の學に屬する見聞を旁證博引したるに過ぎず、經濟學の原理を説くに方ては、殆んき全く通説に従ふものなり。然るに此間に立て英國學者たるマ氏が全然新工夫を凝せるは、甚だ推服す可し。而して氏は第五第六編に入るに先つて先づ第三編に於て需要の本質を論じ、第四編に於て供給の本則を説く。今氏の叙述法を表示すれば左の如し。



之を順序を立て、排列すれば左の如し



而して氏は第一版に於ては、第三編を『需要論』第四編を『供給論』と名けたれども、後版を重ねるに従ひ之を改めて第三編を『欲望及其充足』となし、第四編を『生産要素即土地勞働資本及組織』とせり。同時に、(第五編を『需要供給及價格の一般關係』第六編を『國民所得の分配』とす) 是れ其内容を表はすには、前者に勝ること萬々なれども

之が爲めに折角氏が此書を編むに方りて苦心して得たる獨創の見解を捨て、却て通説に近づき來るに至れるは予の深く遺憾とする所なり。之に依りて第三編は舊來の所謂消費論と殆んど撰ぶ所なく、第四編は所謂生産論と全く其趣を同ふするに至れり。尤も第一版に於ては表題こそ新規なれ、内容に至つては此の嫌あるを免れざりしものなれども、予等は版を改むるに従ひ、氏が嶄新の結構は益々其特色を發揮し、終には名實相合ふ新見地を斯學の上に立つるに至らんことを期待したり。然るに事は却て反對に出で、内容に於て新機軸を出すを見ざるのみか、表題も改りて舊説に近づき來れるは予をして甚しく失望せしめたり。

本章は右の區分に従ひ、需要の説明として欲望及其充足を論ず。即ち消費論に該當するものなり。通説は先づ生産論を以て始め、消費論は之を最終に置くを常とせり。マ氏の新案は之に反し、先づ消費を論じ、次で生産論に入る。予は此點に於て氏の見地に服するものなり。マ氏は從來の學者が稍々もすれば消費の研究を輕視し、甚しきは之を以て正當に經濟學の範圍に屬せずと主張するを非難して、其甚だ重要なるを主張せり。而し

て從來學者が斯く消費の問題を忽諸に附したる原因を論じて曰く、消費の現象は事多く個人の所爲に屬す、されば之を學理的に取扱ふこと困難にして、却て世故に長じたる者の常識の判斷に依るを勝れり、とす、學者が論究到底、其以上に出づること能はず、是れ消費を學術的に論述するの必要少しと看做さるゝ所以なりと。而して氏は、晩近消費論の研究が斯學に重きを成すに至れるは左の三原因に基くものなりと云ふ。

一 リカルドが經濟現象の説明に方り、生産費なるもの、地位を過重し、交換價値は一に之れによりて支配せらるゝが如く説きたるは大なる害を胎するものなるを學者が認識するに至れること。リカルド及其重なる承繼者は必ずしも必要の作用を度外視したるにあらざれども、其意を述ぶる精到明白ならざりしが故に深く心を潜めて讀む者にあらざれば、全く其意を解する能はざりしこと。

二 經濟學者が精密なる思索法の要を認むること漸く深くなるに伴ひ、議論の前提を明確に論定するに注意を注ぐに至り、殊に數學を應用し、數學の式を以て説明を下すこと流行するに従ひ、(數學を複雑なる經濟現象に適用するの可否は別問

題として、先づ議論の目的たる問題の意味を確定するに意を用ゐるに至り、其結果として需要の現象を研究せざる可からざるを認むるに至れること。今日需要の研究は未だ幼稚の状態に在るを免れざれども、既に消費に關する各種の統計材料を蒐集して種々の難問を解釋するに多大の裨益を得るに至れることを看過す可からず。

三 吾人は今日如何にして富の増殖をして猶より多く社會一般の幸福を進むるに足るを得せしむ可きかの問題に注意を注ぐに至り、其結果として公共及個人の使用する富の交換價值が一般の幸福に如何なる程度まで合致するやの必要を痛切に感ずるに至れること。

右の説明は稍漠然たりし雖も、必竟するに近來マ氏高足の門弟ピグーの主張し而して予の衷心より賛同する厚生經濟の見地を言明するものなり。今要點を簡單に言表せば、(一)リカルド流の生産費本位論に換へて、其反對の需要の方面の研究重ぜざる可からざるを認むること。(二)大體論を以て安ぜず、具象的事實的研究を重じ、實際生活に於ては、

生産のみならず消費の問題重要なるを認むること。(三)生産は手段にして、交換價值も畢竟するに欲望充足の力あるが爲に重視せらるゝものにして、生産の研究と共に消費の研究に勉めざる可からざるを認むることの三項を爲すを得可し。而して是は全く予の私見に合する所なり。然れども是に猶加ふ可き一項あり。否此等三箇の原因の亦根本原因とも看做す可きものあり。他なし職近社會問題の大に起り、下層人民の状態に、研究の眼を注ぐに至れること是れなり。言を換へて云へば、從來の經濟學は生産者の經濟學なり、企業家の經濟學なり。資本を投じ土地に勞働を借受けて營利の業に従事する者の貨殖學なり致富學なりき。然るに學者見地の進むに従ひ、經濟學に更らに富の充用てふ最終の目的より觀察せる方面(即ち厚生經濟)の研究を怠る可からず、生産の學たると共に、充用の學なり、貨物を作り出すことを論ずると共に、如何に之を使用し、之を充用するかを説く可き學なり、企業家の學たると同時に、勞働者の學なり、生産費を研究するに同じく生産財に對する需要(利用)を研究する學なること、漸次に認識せらるゝに至れること、是れなり。此點マ氏の言聊か明瞭を缺く故に敢て私見を加ふるものなり。

猶マ氏は末項に本編の要旨を掲げたりと雖も、讀者をして却て適從に苦ましむるの虞あり、故に省きて載せず

第一章 補論

ロシア原論の編成左の如し。(第二十二版に依る)

一、緒論。根本概念他學との關係研究法。二、財の生産。三、自由及財産。四、財の流通。五、財の分配。六、財の消費。七、人口。
シユモラーのは左の如し。

一、緒論。心理的倫理的基礎學史研究法。二、土地人民技術。三、國民經濟の社會的組織。家族住地團體經濟、分業所有及其分配階級企業。四、財の流通及分配の社會的行程。交換競争度量衡貨幣價值及價格、財産資本信用銀行勞働事情救貧保險勞働周

旋職工組合所得及其分配。五、經濟生活の發展。

一と五とは新案に屬す。二は生産論三四は分配交換論にして一は消費論(欲望論)に當る。故に五のみ全然新工夫に成るものと云ふ可し。
猶コーンのを參考の爲め掲ぐ。

一、緒論。二、經濟生活の要素。自然、人口、需要、勞働資本。三、經濟生活の形態。四、經濟生活の行程。生産、交換、分配。

三は稍新案なり。二と四とは全然舊套を襲ふものなり。
右に反しピエルソンのマ氏とも異りて獨創の點多し。

一、緒論。二、交換價值。三、交換要具(貨幣)。四、生産。五、國家の歳入(財政學の一部)。各章の編次も嶄新の工夫多し。

本章の參考書としてはケーンズの經濟學研究法、コツサの經濟研究入門、ワグナー原論の首章、シユモラー同上等を薦む。原名皆前に出たり。

第二章 欲望と經濟行爲

欲望の研究は心理學並に倫理學に屬す。經濟學は此等二學が研鑽して得たる結果を前提として其上に論を立つるのみ。而して從來經濟學に於て欲望を説く甚だ簡單にして其議論亦甚だ淺薄殆んぎ學説としての價值を有せず。マ氏が本章に論ずる所亦此範圍を脱せず。此點に於ては、上はヘルマンより下は近くシユモラーに至る獨逸學者の研究遙かに精到綿密なり、殊に最も新しく欲望の研究を試みたるブレンターノ先生に至つて然りしす。

マ氏が本章に於て論ずる所は詮ずる所、左の二項に歸着す。

一、人類の欲望は文明の進歩に伴ひ、分量よりも寧ろ種類及品質の上に於て増進す、而して之れに伴つて欲望其物を充たすよりも、聲聞の慾を充たさんとの念によつて支

配せらるゝこと強くなる。

二、右と同じく文明の進歩に伴ひ欲望が活動（經濟行爲）の原因たるよりも、寧ろ活動が欲望の原因たるに至る。

氏曰く、文化の程度低き人民の有する欲望は、野獸の有する欲望と多く擇ぶ所なし。文明の進歩に伴ひ欲望は漸次増進するも其増進は一物の多量を意味するに非ずして、より良き品質のものを求める種類のより多からんことを意味す。其嫌ふ所は缺乏にあらずして、單調にあり殊に口腹の欲望に至つては、人間の體質上分量の増加を必要とせず趣の異なり、價貴きものを得んことに専らならしむ。然れども是は終に聲聞の慾に若かず。シ
ーニオン曰く

“Strong as is the desire for variety, it is weak compared with the desire for distinction; a feeling which if we consider its universality, and its constancy, that it affects all men and at all times, that it comes with us from the cradle and never leaves us till we go into the grave, may be pronounced to be the most powerful of human passions.”

種類の變化を求むる念は甚だ強きものなり。雖も而も之を聲聞を求むるの念に比するときは弱しと云はざるを得ず。げに聲聞を求むるの念は其普きこと、其常住不變なることに於て、種類の變化を求むる念の到底及ぶ所にあらず、人生れて死するまで、此念は凡ての人の上に凡ての時に於て、常に働きて息むことなし。されば之を以て人慾中最有力なるものと云ふは當れり。

と。此は固より眞理の全面にあらずと雖も、半面の眞理としては最も推薦す可き言なりとて、マ氏は此理を食料衣服等に就て説明せり。其所論は單純なる常識論に過ぎず。予は如此事を學術的著述に敘するの可なる所以を知らず。是を以てシユモラー又はブレントノ先生の研究に比較すれば、其差霄壤も當ならざるものありと言ふ可し。シユモラーがAnerkennungstrieb(認識を求むる衝動)として論ずる所、況く社會心理の根柢に就て立論せるものにして、甚だ敬重に値す。而して氏は認識の衝動は、文化の程度低き人民に於ても、甚だ有力なる所以を論じて、左の如く云へり。

Kein Mensch kann ohne die Billigung eines gewissen Kreises leben; und je niedriger er steht, de-

sto mehr ist er in jedem Schritt, den er tut, von dem Urteil seiner Umgebung abhängig. Der Mensch isst und trinkt, er kleidet sich und richtet seine Wohnung so ein, wie es seine Freunde, seine Stangeossen für passend halten. Jeder fürchtet sich in erster Linie vor dem, was man von ihm sagen werde; er fürchtet die Sticheleien, er fürchtet, sich lächerlich zu machen. Viele geben Feste über ihre Mittel, weil sie fürchten, sonst getadelt zu werden. Die arme Witwe ruiniert sich und ihre Kinder, um dem Mann ein anständiges Begräbnis zu verschaffen, d. h. ein solches, wie sie glaubt, dass es die Nachbarn erwarten. — Schmoller, Grundriss, I. 1919, S. 30.

人として一定の範圍の認識を得ずして生活し得る者はあらず。其文化の程度低き程、其爲す所の一舉一動皆周圍の人々の判断に依頼するものなり。人は其食其飲其衣其住皆其の朋友同胞が適當と認むる様に爲すものなり。人は皆他人の外聞なるものを第一に憚る。人は他人より笑はれんことを最も怖る。多くの者は其資力不相當の饗宴を張りても他人の嘲を招かざらんことを勉む。貧しき寡婦も世間の嘲笑を免れんが爲めに、其夫の爲めに華麗なる葬式を行ひて、己れと己れの子を零落の淵に沈むるを辭せざることをあり。

マ氏が文化の發達に伴ひ聲聞を求むるの念増す云ふに比すれば遂かに事の眞を得るに近し。

ブレンタノ先生も亦曰く、

Tatsächlich ist dieses Bedürfnis (nach Anerkennung durch Andere) weit dringlicher und tritt geschichtlich weit früher hervor als andere Bedürfnisse, welche die Betrachtung über das Seinsollende diesem Bedürfnis vorausstellen pflegt. — Brentano, Versuch einer Theorie der Bedürfnisse. München 1908. S. 19.

事實上に於ては他人の認識を得ん事の欲望は他の欲望よりも遂かに強く、又歴史上遂かに早く起るものにして多くの學者が他の欲望を以て先なりとするは事實に基かず、單に理想的に『斯く在らざる可からず』てふ架空の構想に基く謬論なり

マ氏亦此謬想に陥れるもの甚だ惜む可し。

次に氏が活動は欲望に先つ所以を論じたるは甚だ當を得たりと雖も、是れ亦シュモラ一等が説く行動の衝動 Tätigkeitstrieb の論に比すれば、論旨幼稚の嫌あるを免れず。マ氏

曰く

Speaking broadly therefore, although it is man's wants in the earliest stages of his development that give rise to his activities, yet afterwards each new step upwards is to be regarded as the development of new activities giving rise to new wants, rather than of new wants giving rise to new activities.

故に況く言ふべきは人類發達の程度低き時に於ては、欲望ありて後活動起るものなれど、以後は向上の一步毎に新欲望が活動を惹き起すよりも、寧ろ新活動が新欲望を招致すること愈發達するものと認む可きなり

マ。然るにシュモラーは曰く

Wir beobachten den Tätigkeitstrieb schon beim Kinde, das mit Bauklötzchen ein Haus baut, das sägen und reimen, pappen und malen will.....

行動の衝動は既に幼童に於て存するを見る家を作り、木を鋸り、詩を作り、紙細工し、畫を描く皆行動の衝動の然らしむるに非ざるはなし

文化の進歩は行動の進歩を多様ならしめ、其目的を複雑高尙ならしめ、こゝすれ衝動其物は文明人と野蠻人とを支配するの度合に於て異なるものにあらず、マ氏の論は僅かに一斑を捉へて全豹をなすものなり。

而してマ氏は以上の立論に基て斷案を下して曰く、

It is not true therefore that "the Theory of Consumption is the scientific basis of economics (Bannfeld)." For much that is of chief interest in the science of wants, is borrowed from the science of efforts and activities. These two supplement each other.... But if either, more than the other, may claim to be the interpreter of the history of man, whether on the economic side or any other, it is the science of activities and not that of wants.

以上云ふ所を綜合すれば、バンフィールドが嘗て主張したる「消費論は經濟學の根柢なり」の論は眞ならざるを知る可し。何となれば欲望論に於て重要な研究は多く努力及行動に關する學理より借り來るものにして、此兩者は相互に補ふものなり。乍去兩者の内何れか人類歴史を解釋するに於て重しとするかを云はば、經濟上に於ても其他の

方面に於ても、其は欲望の學理にあらずして行動の學理なればなり

と従て氏は本編に於て論ずる欲望の理論は、單に形式的性質のものに止るものにして、欲望に關する最終の研究は經濟學の始めに來る可きものにあらず、最尾に來る可きものなり、否經濟學の範圍を超越するものなりと云ひて脚註中にヘルンの『ブルートロデー』に就て數言を費やして本章を結び。是れ第一章に於て既に示せる如く、マ氏は正統學派の舊套を脱せず、欲望の研究は經濟學以外に在る可きものなりとの見地を執る當然の結果にして、行動即ち經濟行爲及其結果のみに重きを置きて、經濟行爲の淵源なる主觀的方面を輕んずるは、マ氏の如く從來の客觀主義を守るものに於ては、敢て異にするに足らず。本編の全部はマ氏の此立場を十分諒解したる後にあらざれば、其眞意を汲み難し。讀者先づ心を茲に用ふるよ。

右のマ氏の見解に反對するは、主觀學派たる獨逸學者の殆んど全部(デーツェルを除く)の執る所の説なり。プレントナー曰く、

Ausgang aller Wirtschaft ist das Bedürfnis. Der Mensch empfindet Bedürfnisse. Diese rufen seine

wirtschaftliche Thätigkeit hervor. Ihr Ziel ist die Befriedigung der Bedürfnisse. Mit Recht ist daher zu sagen: die Theorie der Bedürfnisse ist die wissenschaftliche Grundlage der Wirtschaftslehre. (Banfield) S. 1.

凡ての經濟の出发点は欲望なり。人は欲望を感じ、經濟行爲茲に起る。經濟行爲の目的は欲望の充足にあり、故に欲望は經濟學の學理的基礎なりとバンフィールドの云へるは至言と言はざるを得ず。

此言は今日の價格經濟殊に資本主義經濟に就ては、其儘之れを受入るゝこと能はず寧ろマシアルの見解の方當れるを認めざる能はず。其の他方に於て、近來ピギーの唱へ、マシアルも亦時に暗示したる厚生經濟の見地に立つときは、確かに、一部の眞理を道破したものと云はざるを得ず。但しバンフィールドの如く、欲望の理論を以て直ちに經濟學の基礎なりとするは、今日の研究之れを承認せず、目的論的の解釋の方寧ろ正鵠を得るに庶幾しとせざる可からず。故にバンフィールドの欲望を改めて利用とせば、粗ぼ當を得たりと爲すを得可し。

第二章 補論

マ氏は脚註中にヘルマンの欲望の分類を擧げ如此區別は價值多からず云ふ。此論予の全く従ふ所なり。ヘルマンは

- 一、絶對的欲望 相對的欲望。
- 二、高等欲望 劣等欲望。
- 三、急切欲望 延し得可き欲望。
- 四、積極的欲望 消極的欲望。
- 五、直接欲望 間接欲望。
- 六、一般欲望 特殊欲望。
- 七、常住欲望 間歇欲望。
- 八、永久欲望 一時欲望。
- 九、經常欲望 非常欲望。
- 一〇、現在欲望 將來欲望。
- 一一、個人欲望 團體欲望。
- 一二、私的欲望 公共欲望。

の區別を爲せり。經濟學の諸教科書皆其鑿に倣ひ、或は精神的欲望肉體的欲望絶對相對等の種々の種類を擧ぐるを常とすれども、予はマ氏と同じく全く其説を執らず。之に反

しシユモラーが衝動より見て立てたる分類論は予の服する所なり。氏は先づ快不快の感情に論を起し續て(一)自存衝動(二)性的衝動(三)行動衝動(四)認識衝動(五)競争衝動(六)營利衝動の別を論ず。而して氏も從來の欲望分類法を非難す其言に曰く、

Es will mir scheinen, dass mit der blossen Einteilung der Bedürfnisse in einige Kategorien nicht viel gewonnen sei. S. 23.

予を以て見る欲望を單に二三の部類に分別するは學理の上を得る所尠し。蓋し至言なり。

ブレンタノ先生は欲望の順次を其緊切の度より觀察して左の如くなりし論ず。

- 一、生命維持の欲望。
 - 二、性的欲望。
 - 三、聲聞を求むる欲望。
 - 四、死後の計に對する欲望(宗教上の欲望)。
 - 五、保温の欲望。
 - 六、將來の計に對する欲望。
 - 七、療養を求むる欲望。
 - 八、清潔を求むる欲望。
 - 九、學問技藝に對する欲望。
 - 十、創造せんこの欲望(即ち行動の欲望)。
- (同上欲望論十一頁至三十五)

欲望の種類を分つこゝ學者の隨意なれども其總てを通じてシユモラーが認識(聲聞)を求むる衝動を稱するもの即ちブレンタノが第三に置く所のもの、マーシアルが desire for distinction 云ふものこそ今日實際生活に於て欲望の限度を定むるものなることは、之を認めざる可からず。ブ氏の所謂最緊切の欲望たる生命維持の欲望も其最下位に置く學問技藝に對する欲望も單に生命を維持し學理を尋求するを以て止るものにあらず、一定の社會團衆の認識を得可き標準ありて人は皆此標準に達せんを勉むるものなり。單に飢を充し渴を醫すを以て甘んずるものあるなし必ずや自己の身分に應じ一般の認識を受け得可き食物飲料を一般の認識を受け得可き時所方法に於て得んを勉むるものなり。此點より云へば聲聞の欲望こそ今日の經濟生活に於ける欲望の根柢たり中心たり又發足點たり到達點たるもの云ふ可きなれ。而も之と共に常に働きて已まざるものは、シユモラーの行動の衝動を名けブレンタノの創造の欲望は左右田博士の「創造者價値」を稱するものは是れなり。人は何をも爲さずして一日も過し得るものにあらず。其心は思ひ其手は動きて何事をか爲し何物をか作り出さんとして息まざるものなり。無爲の生活

ほき人に苦痛を興ふるものはあらず。人は何を求めず、何を望まざるこそ猶動き働かんを欲す。動き働きて後に至りて欲望始めて生ずること屢々あり。マールシアルが行動は寧ろ欲望に先つて云入るは此意に解す可きなり。

* * * * *

本章参考書は前文中に掲げたるシュミラー、ブレントノ兩氏の著書の外

Banfield, Four lectures on the organization of industry. London 1845.

あり。其他見る可きものは左の如し。

Kraus, Das Bedürfnis. Leipzig 1894.

Cübel, Zur Lehre von den Bedürfnissen. Innsbruck 1907.

Ehrenfels, System der Werttheorie. Leipzig 1897.

Meinong, Psychologisch-ethische Untersuchungen zur Werttheorie. Graz 1894.

Herrmann, Staatswirtschaftliche Untersuchungen. 2. A. 1870. S. 78 ff.

福田徳三 企業心理論 經濟學研究七五一頁以下

福田徳三 企業倫理論 續經濟學研究五八頁以下
猶マールシアルの引用せる

Hearn, Philology, or Theory of the efforts to satisfy human wants. London 1864.

Jevons, Theory of political economy. 1871. 4. Ed. 1911.

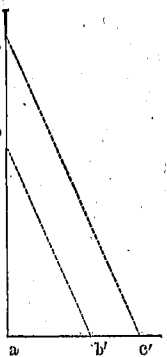
等を見よ。

第三章 消費者需要増減の理

汎く人生の立場より見る可きは消費は目的にして生産は手段なり。生産の起るは消費ある可きを豫定するに依る。従て最終の需要は常に消費者の需要を措て外なく、生産者又は商人の需要は消費者の需要を基とする第二次的需要なり。今日の營利經濟に於て一物を生産し、一財を买入る、生産者商人は常に之より生ず可き貨幣價值稱呼の利益

を目的とす。此利益は投機の見込及其他の原因によりて定めらるゝものなることは後に説く所の如し。雖も、人間生活の本義より之を見るべきは、其凡ては消費者が其生産物又は商品に對して支拂ふ價に依りて定めらるゝものなること論を須たず。言ひ換れば、消費者の需要は、總ての階段に於ける需要の根本たるもの云ふ可し。本編は此意味に於て最終需要たる消費者需要に就て論ぜんとするなり。マ氏曰く、消費者の需要は營利的需要(Trader's demand)を支配す。語簡にして盡せり。

消費者の需要は利用となりて顯はる。經濟學に於て云ふ利用は、原則として貨幣價值によりて言表はされ得可きものに限ることは前編之を論ぜり。即ち今消費者の需要を論ずるに方りては、其貨幣價值に顯はれたる利用より推して之を測定す。元より財の人に與ふる満足の度合は必ずしも皆悉く貨幣價值に顯はるゝもの斷ず可からず。雖も、大體に於て物の價格は其利用と相照應するものに見て差支なし。價高き物利用多く、價低き物利用少し。之を譬へて云へば、猶ほ形と影との如し。影の長さは物の長さにあらず、而も一定時に於て影長きときは、形長く影短きときは、形短し。利用は形なり、價は影なり。今此理を圖解すれば、粗ほ左の如くならん。



- (一) abなる利用は、abなる價となりて顯はれ
- (二) acなる利用は、acなる價となりて顯はる
- (三) abの長さと、abの長さと同からず
- (四) acの長さと、acの長さと同からず

人の欲望は無限なり、而も亦た有限なり。無限なり云ふは、欲望其物に就て見るべきにして、有限なり云ふは、欲望の對象より見たるべきなり。欲望其物に就て見るべきは、得るに従て多々益々辨じ、所謂階を得ば、獨を望む、決して限界あることなし。然るに特定の對象に對する、特定の人特定の時特定の場所特定の事情に就て見るべきは、欲望は極めて有限的なり云はざるを得ず。されば、欲望無限の原則あり、欲望有限の原則あるは、決して矛盾にあらず。經濟學に於ては、從來多く欲望有限の原則を説き、無限の原則に及ばず。然れども、經濟上總ての進歩の有力なる原因は、人類の欲望無限にして、絶へて満足し終ることなきに依るものなることは、學者の夙に説く所なり。唯夫れ無限に彌る欲望其

物は寧ろ倫理心理の研究に屬し之を經濟學に於て説く或は其所ならざるに似たり。之に反し欲望有限の原則は嚴密に經濟學の範圍に屬す。既に前に説ける如く多くの學者は抑も經濟なる概念を定むるに有限性又は稀少性(存在量の限られたる財)を主なる要素と爲すは畢竟此が爲め云ふ可し。

欲望有限の原則は經濟學に於て之を『利用遞減の法則』『欲望飽實の法則』又は『快感遞減の法則』云々。マ氏の Law of diminishing utility 又は Law of satiable wants を稱し獨逸學者の Gesetz des abnehmenden Reizes を稱するもの即ち是なり。マ氏曰く欲望の種類は限なしと雖も各箇々の欲望には限界ありと。言盡さずと雖も意は即ち右述ぶる所に同じ。マ氏は利用遞減の法則を左の如く定義せり。

The total utility of a thing to anyone (that is the total pleasure or other benefit it yields him) increases with every increase in his stock of it, but not as fast as his stock increases. If his stock of it increases at a uniform rate the benefit derived from it increases at a diminishing rate. In other words, the additional benefit which a person derives from a given increase of his stock of a thing,

diminishes with every increase in the stock that he already has.

特定の人に對する、特定財の全部利用(即ち其與ふる快樂其他の便益の總體)は其財の分量の増すに従つて増すに雖も、其比例は同じからず。財の分量一定率に従つて増すときは、之より生ずる便益は遞減率に於て増す。換言すれば、一定財の一定増量より生ずる便益の増加は其財を有する分量多き程遞減するものなり

即ち財の増加は、全部利用を増加すれども、箇々の増量の利用は、却て遞に減少し行くものにして、終には増量より得る利用は之を得るが爲に費す費用(價)又は勞働の犠牲を償ふ能はざるに至る。然る場合には、原則としては、増量を得んとするの念を絶つ可し。費す所得る所に超過せず、從て猶之を得んを欲する需要の起る最低限を稱して、マ氏は『限界購入分』marginal purchase を云ふ。此點を限界とし、其以下の利用の増加にては最早購入の念を絶つ可きが故に斯く名くるなり。而して此『限界購入分』の與ふる利用を稱して『限界利用』marginal utility を云ふ。自己自ら生産する場合に於ては、限界利用は限界生産量の利用なり。今此限界利用の語を以て前述の利用遞減の法則を改め言ふときは

特定の人に對し特定物の與ふる限界利用は其人の既に有する其物の分量の多きに從ひ減少す。但し此法則には一の前提條件あり。即ち其特定人特定物は亦た一定の時間の下に在る可き事はれなり。時を異にするときは人の嗜好に變化を生じ從て多々益々辨ずることありて此法則は行れず。マ氏即ち云ふ

It is therefore no exception to the law that the more good music man hears, the stronger is his taste for it likely to become; that avarice and ambition are often insatiable; or that the virtue of cleanliness and the vice of drunkenness alike grow on what they feed upon. For in such cases our observations range over some period of time; and man is not the same at the beginning as at the end of it. If we take a man as he is, without allowing time for any change in his character, the marginal utility of a thing to him diminishes steadily with every increase in his supply of it. されば右の法則と矛盾するが如き多くの事例も其實矛盾にあらず。例へば音楽を聴くべし、懶々腹にして之に對する趣味の益々加はるが如き、食慾名譽心の絶えて飽き足るゝ

無きが如き、清潔の美性、飲酒の悪癖の多々益々増進して已むなきが如き、是等皆一定時に於ける出來事にあらず、長き時間に涉りて起るべきにして時を経るに從ひ人の性格と其趣向とに變化の生ずるが爲めに外ならず。されば之れを一定時に限りて觀察するときは、音楽を終日聴くものは厭き、飲酒多量に及べば陶然として辨ぜざるに至る可くして、利用遞減の法則必ず行はれ、限界利用は其得る量の多きに從つて遞減するべき疑なきものなり

こ。是れ即ち予が前段に欲望無限の法則と有限の法則とは決して撞着するものにあらず、觀察點を異にするに從ひ、或は一或は他の原則支配するものなりと云へる言異にして意同じきなり。唯マ氏がこれを一の前提條件なりとし、又單に時間の經過の如何を以て兩者を説明し去らんとするは、聊か服し難し。欲望無限の原則は有限の原則と相對立する同位原則なり、單に一の前提條件たるに止るものにあらず。否、欲望無限の原則先づ在りて有限の原則其意味を成すものなり。欲望其物無限なるにあらざれば、利用遞減の法則なるもの殆んき存在の理由なし。無限なる欲望の働きて止まざればこそ、箇々の對

象箇々の時箇々の事情の下に於て利用遞減の現象起るものなり。何こなれば利用遞減は畢竟物自らの性質に變化あるを意味するにあらず物に對する主觀的欲望の減少を云ふなり。從て嚴密に云ふ時は遞減するものは物に附着する利用性にあらず之に對する人の欲望なり。變ずるものは人の心にして物の性にあらず。何故に人の欲望は得ん事彌々多くして彌々減ずるや云ふに其が無限にして一物を得ば更らに他物を得んし綿服を得るものは絹衣を欲し米を食ふものは魚を欲し酒を飲むものは肉を望み從て其既に得たるものを更らに附加せられんよりは其未だ有せざるものを得んこの念強く其結果既に有するものに對する欲望遞減して茲に其特定物に對しては利用遞減の作用起るものなればなり。故に曰く欲望無限の原則ありて欲望有限の原則其働を生ず。縱令時間の經過あらざるも欲望無限の原則は有限の原則の根源として常に其働きを廢するこごなし。但し時間の經過あるときは無限の法則の働は表面に顯はれて發動し容易に人の注意を惹くに至るものなるこごはマ氏の論ずる處當れり。

利用は經濟上に於ては價によりて言顯はさるこご前に説けり。今利用遞減の法則

を細説せんには價の上に表はれたる其働作を見るに若かず。マ氏は之を日常生活必需品の一なる茶に就て例證せり。左に之を示さん。

茶	一斤	此價	二志		
		此茶に對し需要者が支拂はんこごする最高の價		十志	
		此茶無料なるこご需要者が得んこごする最高量		一ヶ年に	三十斤
		然るに實際需要者が價二志の場合に買ふ分量		一ヶ年に	十斤

こごせよ。此場合に於ては第九斤と十斤とより得る満足の差額は價に言表はして二志なる可き理なり。之と同じく第十一斤は二志を支拂ふ可き丈の利用なき理なり。即ち二志なる價は限界購入分(即ち第十斤)の利用(即ち此場合に於ける限界利用)を言表はすものなり。而して限界購入分に對して支拂はんこごする價換言すれば限界利用を貨幣額にて言表はしたる此二志なる價は之を『限界需要價』marginal demand price と稱して可ならん。依て左の定義を得るなり。

人の有する一物の分量多き程彼が更らに加へて得んこごする増量に對して支拂はんこ

する價格は少し。換言すれば之に對する需要價格は遞減す。但し此場合に於て他の事情即ち貨幣の購買力買手の所有する貨幣の額何れも均しきものと前提するは勿論なり。

乍去茲に忘る可からざるは、需要が需要として其働きを爲し得るは、此需要價格、(即ち買手が買はんことを價)に於て賣らんことを賣手あることに限ることとなり。從て右の法則の行はるゝには常に貨幣即ち一般購買力の限界利用に於る變化如何を度外視す可からず。貨幣の限界利用に變化生ずるときは、需要價格は同一金額を以て表はさるゝ、さも其働きは同じからず。然れども一定の時一定の所一定の事情の下に於ては貨幣の限界利用亦一定なるが故に貨幣額の多少は直ちに利用の多少に相應するものにして、一圓の需要價格あるものと、十圓の需要價格あるものとは其利用の差亦一と十との關係に在るものと推定して差支なし。

貨幣の限界利用は時を異にし所を異にするによりて同一人に取りても亦差違を生ずるは、元より言を俟たざる所なれども茲に特に忘る可からざることは貨幣の限界利用も亦物の限界利用に均しく、一定人が既に有する分量多きに從ひ其限界利用少きことはなり。之を名けて『貨幣利用遞減の法則』と爲す或は不可ならじ。マ氏故に曰く貨幣の限界利用は富者よりも貧者に向て大なりと。百圓の收入ある人三三百圓の收入ある人と均しく乗るに前者は一月二十回乗り、後者は五十回乗るにせよ。前者の二十回の乗車の限界利用後者の第五十回の乗車の限界利用共に四錢なる貨幣額によりて言表はさる。而も前者に取りて四錢なる貨幣額の有する限界利用は、後者に取りて同額の有する限界利用よりも大なり。即ち人富めば富む程貨幣の限界利用を減じ從て一定の利用に對し支拂はんことを價格は増す。之に反し貧き程貨幣の限界利用多く從て一定の利用に對して支拂を肯てする價格は減ず。

されば利用遞減の法則は常に兩面より觀察を下すを要するものなり。

一 有する財の量多き程其財の限界利用減ず。

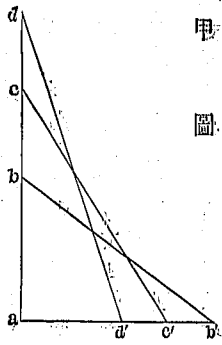
二 有する貨幣の額多き程貨幣の限界利用減ず。

財を有すること多きも貨幣を有すること少きもの財を有すること少きも貨幣を有する

多きもの、兩者は同一價格の限界利用を表はさず。即ち財の量と貨幣の額は遞減の法則の上に於て常に反對の作用を有す。時及所の同一なるに於ても此兩個の反對作用は利用遞減の法則の働きを支配するものにして、一を取りて他を捨つること能はざるものなり。

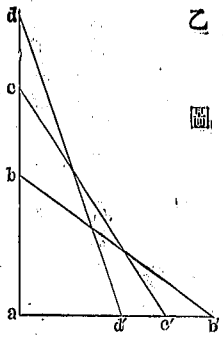
今圖解を下げば左の如し。

甲 圖



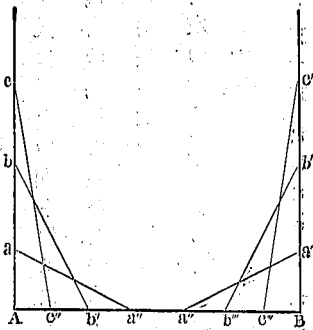
- (一) ab量の財を有するものに向ての其財の限界利用はabなり
- (二) ac量の財を有するものに向ての其財の限界利用はacなり
- (三) ad量の財を有するものに向ての其財の限界利用はadなり

乙 圖



- (一) ab額の貨幣を有するもの、貨幣の限界利用はabなり
- (二) ac額の貨幣を有するもの、貨幣の限界利用はacなり
- (三) ad額の貨幣を有するもの、貨幣の限界利用はadなり

丙 圖 (甲乙兩圖を併せたるもの)



- (一) Aa Ab Acは物の所有量にしてAa'' Ab'' Ac''は其各の限界利用を示す
- (二) Ba' Bb' Bc'は貨幣の所有額にしてBa''' Bb''' Bc'''は其各の限界利用を示す
- (三) Aa''' Bb''' Bc'''の限界利用より其需要價格定められ
- (四) Ab''' Bb''' Bc'''の限界利用より其需要價格定められ
- (五) Ac''' Bc''' Bc'''の限界利用より其需要價格定められ

其他之に準じて知る可し。

マ氏は以上の理を更らに茶の例に就て細説せり。其大要左の如し。
 價格の高低に従ひ人が其物を買はんことを欲する分量異なる。今若干の價格を設け之に對する需要の量を示したる表を名けて『需要定表』Demand Schedule と云はん。引例せる茶に就て左の如く假定するときは之を茶の需要定表と云ふ。

價格	需要量	價格	需要量
五十志なるとき	六斤	四十志	なるとき 七斤
三十三志	八斤	二十八志	九斤
二十四志	十斤	二十一志	十一斤
十九志	十二斤	十七志	十三斤

今需要の増加と云ふときは其意

- 一 價に變動なき場合には買はんことをする分量の増加することを意味し
- 二 價騰貴する場合には従前に同じき分量を買ふことを意味す

即ち右例に於て茶一斤の價十七志にして變動なき場合には十三斤は増加して十五斤となり又は茶一斤の價十九志に騰貴するも猶十三斤を買ふを云ふなり。之に反し一定の時價に於て買はんことをする分量の増加するのみならず需要定表の全體に涉りて支拂はんとする價の増進して例へば

需要量	支拂價格	需要量	支拂價格
六斤	五十一志	七斤	四十一志
八斤	三十四志	九斤	二十九志
十斤	二十五志	十一斤	二十二志
十二斤	二十志	十三斤	十八志

と異なるが如き場合は之を一般的の需要増加と云ふ。

以上は専ら個人の需要に就て立論する所なりと雖も茶の如き一般的必需品の場合には一般市場に於ける需要増減の理は個人の需要より推して論及するを得可し。然れども物によりては必需品なりとも個人需要變動の理は直ちに移して一般市場需要を説明

するに適せざるこゝあり。況んや必需品ならざるものをや。然れども個人的性癖嗜好特色より起る需要の差違は、一般市場に顯はるゝときは多くは相殺平均するものにして、此點に於て個人的需要の法則は、一般市場需要の法則と多く異らざるものと認めて差支なし。マ氏は即ち總てを一貫する需要の法則を定義して左の如く云へり。

The greater the amount to be sold, the smaller must be the price at which it is offered in order that it may find purchasers, or, in other words, the amount demanded increases with a fall in price, and diminishes with a rise in price.

賣る可き分量の多き程買手を得んが爲めに提供せらるゝ価格は低し。換言すれば需要の量は、価格の下るに從ひて増加し、昇るに從ひて減す

但し兩者の比例は必ずしも合致するものにあらず。價一割下落して需要は五分増すこゝあり、四分の一増すこゝあり、又は二倍となるこゝあらん。唯分量増すこゝ價下り、價昇るこゝ需要減するの一事は疑を容れず云ふのみ。

以上は一定の時、一定の事情の下に於て見るこゝみに限れり。事情異り、時を隔つるこゝ

は右の理適用す可からず。就中競争品の起るこゝ(茶に對する珈琲、瓦斯に對する電氣の如き)は、需要の變動は全く右の理を以て説く能はざるものなり。

右紹介せるマ氏の需要増減に關する理論は、畢竟するに後に説く所の「收穫遞減の法則」Law of diminishing return を應用して、英國學派の限界利用説を布演したるものなり。

其特殊の點を認む可きは、利用其ものは直接に秤量するを得ず、貨幣價值に於ける其發現より推及して間接に測定す可きものなりとする是なり。此論は既に屢々説きたる原則を一貫して維持するものにして、予亦之に和するものなり。然れども、今本編は欲望と其充足を究めんとするものにして、價格論を試むるにあらず。マ氏の説く所は、多くの學者が價值價格論に於て論ずる所を採り來れるものにして、聊か立論の順序を紊るの嫌なきに非ず、讀者之を商量せよ。

第三章 補論

本章論ずる所の問題は數學的に取扱ふに甚だ適當し、又斯くするによりて研究の便を得ると妙からざるものなり。乃ちマ氏は脚註並に附録に於て之を試みたり。予は總ての經濟現象を數學的に取扱ふ可しとする所謂數學派經濟學者の主張に與する能はざるものなれども、本章の問題に至りては論者に服するを禁ずる能はず。唯予自ら凡ての數學的素養を缺くが爲に、之を企て得ざるは深く自ら愧づる所なり。

抑も數學的經濟研究を始めたるは佛國の學者クールノーにして、其著す所に *Recherches sur les Principes mathématiques de la théorie des richesses* 1838 あり。近來に至りては佛國の學者にして永く瑞典の大學に教授たりし Walras 其門弟 Pareto 並に英國の學者 Jevons 最も此種研究を以て顯はる。然れども予の見る所を以てすれば、數學を應用して經濟現象を論究し、殆んぞ今古獨歩の功を立てたるものは獨逸の學者 Hermann Heinrich Gossen なり。マ氏の云ふ如く、ゴッセンの業は世人に忘れられ、其著を讀むもの甚だ妙しと雖も、今日に

於て猶寸毫も其價值を減ぜざるものは彼なり。殊にゴッセンは本章論ずる問題に就て甚だ深遠なる研究を遂げたり。其著は

Entwicklung der Gesetze des menschlichen Verkehrs, und der daraus fließenden Regeln für menschliches Handeln.

『人類交通の法則の發展並に是より生ずる人類行爲の原則』

と稱し、千八百五十三年出版せられ、千八百八十九年柏林の書肆ブラーガー版本絶へて久しきを慨き、原版を其儘重刊せるものあり。而も此重刊本亦流布甚だ少く、今に至て學者の願るもの多からざるは甚だ惜む可き所なり。予は幸に一本を得て之を讀むこと一次にせし、まらざれども、今に至りて其真意の究め難きを歎ぜざるを得ず。此本を入手する能はざりし事情を其著序文中に詳述せり。當時英國には英國博物館に唯一本ありしのみ云ふ。予が指導の下に、ゴッセンを特に研究したるは、小樽高商の手塚教授なり。其著『ゴッセン研究』は、寫學の業として寫むるに足る。

近來英米國に於る數學派經濟學者皆其思想の源をゴッセンの古き泉に汲む。殊にジエヴォンスに至りては、獨逸文を其儘英文に言改めたるに非ずやと迄認めらるゝ所あり。

マーシャル亦屢々ゴッセンを引用し、近く欲望論を著したるブレンタン先生もゴッセンの所論より取る所尠からず。源泉深くして汲めども盡きず。思ふに向後「ゴッセンに歸れ」云ふ者或は出でん。ゴッセンは其序文中に自己の創説を以てロバートニクスに比せり。其抱負の大なる想見す可く、而して言必ずしも自己過信に出づるものにあらず。今日煥國派の新説をして世に知らるゝものゝ多くは、ゴッセン既に之を五十年の前に道破せり。本章説く所利用遞減の説の如き儘かに然り。今其證左として左にゴッセンの一節を掲げん。

Darum bleibt als ein allgemein gültiger Satz bestehen: dass die einzelnen Atome eines und desselben Genußmittels linen höchst verschiedenen Werth haben, und dass überhaupt für jeden Menschen nur eine bestimmte Anzahl dieser Atome, d. h. eine bestimmte Masse Werth hat, eine Vermehrung dieser Masse über dieses Mass hinaus aber für diesen Menschen vollkommen werthlos ist, dass aber dieser Punkt der Werthlosigkeit erst erreicht wird, nachdem der Werth nach und nach die verschiedensten Stufen der Grösse durchgegangen.....dass mit Vermehrung der Menge der

Werth jedes neu hinzukommenden Atoms fortwährend eine Abnahme erleiden müsse bis dahin, dass derselbe auf Null herabgesunken ist. S. 31.

故に次の一般的原則生ず。一定の消費料の箇々の原子は甚だ異なる價值を有し、箇人に取りては此原子の一定數(一定量)のみが價值を有するものにして、此定量以上に増加するときは、其人に向つては全く價值を有せざるに至り、而して此無價值點は、價值が遞次に各種の大きさを經過したる後に到達す。.....分量を増加するときは、凡ての新たに加はる原子の價值は絶へず減少し、終には絶無に歸するに至る。

シエツオンスは即ち之より total utility (全部利用) final utility (最終利用)なる新術語を作り出し、煥國派は Grenznutzen (限界利用)なる熟語を作りしに過ぎず、其内容は全く右に盡きたり。而してゴッセンの茲に原子を稱するものは、マ氏の marginal dose (限界部分) を稱するもの、依て出づる所なり。

次にゴッセンは人類行爲の根本原則として左の數者を論ぜり。

一 消費の按排は、之によりて人間一生の享樂の總量が最大なる可きを期せざる可から

而して

二 人間は其一生の享樂の總量が最大なる可き様に其行爲を企劃す。

一 同一享樂の大きさは絶へず之を繼續するときは、遞次に減少し終に飽實の點に至て曰む。

二 嘗て得たる享樂を繰返すときは、其享樂の大きさは同じく遞減す。而して、繰返されたる享樂其ものが減するのみならず、之を始むるときは、享樂の大きさも前よりは少し。又享樂を享樂として感ずる時間の長さも一回よりは二回、二回よりは三回に於て短く、飽實點の到來するに早く、繰返の速なる程、其享樂の大きさも時間も共に減す。

而して又次の三原則生ず。

一 享樂繰返の繁閑は、其總量を最大ならしむるを得んことを目的として定められ、從つて箇々の享樂の種類方法を左右す。最大量を得たる後にありては、其繰返の繁閑を問はず必ず減少す。

二 多くの享樂併存するも時間之を許さざるときは、其享樂を一部に止め其各部より得る享樂の均一ならんことを期す。

三 享樂の總量を増すを得るや否やは、新なる享樂を見出すか、既に在る享樂を自己の改進又は外界への作用によりて増進するを得るや否やによりて定まる。

ゴッセンは以上の原則を立證し説明するに悉く數學の方式を用ゐ、終に至りて、斷言して曰く、

以上論じたる原則を究め、是より人間行爲の根本原則を立て、之を守るときは、地球には天上の樂園に存するもの、一として欲く事なきに至らん。人よ先づ思を潜めて、予が言を玩味せよ、汝の前に大なる幸福の福音横れり、取りて、汝自らを幸福ならしめ亦之を世に施す。

ゴッセンは二百七十七頁章節の區分なく、表題なく、目次なし。自ら云ふ、之は二十年間沈思熟考の産物なり。唯此一巻の書を留めて、自ら喜び自ら安ず。誠に稀有の事に屬す。ゴッセンを深く研究し、欲望論の通説に一步を進むるに、予は唯だ之を遠き將來に期し

得可きのみ。其後獨逸にありてはリーフマン、ゴツセンを研究して我等を教ふる所跡からず。讀者須らく往見して之れを知る可し。

* * * * *

本章の参考書は前章に掲げたるものを見よ。

第四章 需要伸縮の法則

需要の増減は之を充す可き財を有する多少によりて支配せられ財多きとき需要減じ、財少きとき需要増すの理は、前章之を明かにしたり。之と同じく、貨幣を有する可き多きもの需要多く、少きもの需要少き可き亦之を論ぜり。今次に考究す可きは、此需要の増減に緩急遲速の差異ある可き是れなり。或種の需要は著しく増し若くは減じ、或種の需要は其増す可き減ずる可き共に甚しからず。之を名けて需要の弾力性(伸縮性)と云ふ。即ち増減の著しきものは弾力性大なりと云ひ著しからざるものは小なりと云ふ。然る

に茲に直ちに起る問題は、此弾力性は如何にして之を知るを得るや之なり。

凡そ經濟上の現象は、直ちに原因に就て究むる可き困難にして、多くは顯れたる結果より推及して測るの外なき可きは、前章屢々論じたる所なり。今需要の弾力性も多くは顯はれたる作用より推して其大小を知るの外なき可き、他の經濟現象に異ならず。價昇るも、需要額減ぜざる可き、若くは價變動せずして需要額増すとき、之を需要の増加と云ふ。需要の弾力性は、此二の場合に於て發現す。即ち價の騰落に對して需要の増減の著しきか否かによりて其需要の弾力性大なるか小なるかを知り得る如く、價變ぜざるも、需要額の増減著しきか否かによりて其需要の弾力性の大小なるか、小なるかを知り得可き筈なり。然るに、價變ぜずして、需要額増減する場合は、其原因甚だ多く、之に一定の説明を下す可き、殆んど不可能なり。從て此場合に於ける需要の増減に就て其弾力性を究むる可き困難なり。之に反し、價に變動ありて需要額増減する場合は、其原因は價の變動てふ一定のものなるが故に、之より推して其需要の弾力性を知る可き難事にあらず。需要の弾力性其ものは、右孰れの場合に於ても存在するものにして、價の變動ありて始めて此性質發生す

るにあらざるは勿論なり。唯價の變動あるとき此性質は顯著に表面に發動して人之之を知るこゝ容易なるなり。價の變動は需要の弾力性を顯はれしむるこゝ猶ほ熱の物體に於けるが如し。熱度高まりて物體伸び下りて物體縮む而も其伸縮の度は物體によりて異れり。吾人は其異なる伸縮性を知るに熱の高低を以てす。價が需要の弾力性に於ける亦然り。價の高低により伸縮する度合の異なるを見て吾人は其需要の弾力性の大小を推測す。然れども物體の伸縮は熱度のみによらざるが如く、需要の弾力性も價の高低のみに依るにあらず。今マ氏が本章に於て、需要の弾力性を論ずる所は、偏に價の高低のみを以て之を測らんとするものに似たり。予は異論なき能はず。

マ氏曰く財の供給増すに従ひ之に對する欲望減ず此欲望減少の度に速なるあり遅きあり遅きものにありては供給著しく増すも之に對して支拂はんとする價下るこゝ少く又は價僅かに下るこゝ購はんとする分量著しく増す。之に反し其速なるものにおいて價少しく下るのみにては購はんとする分量増すこゝ少し。前の場合は價の下落より來る僅かの刺戟も購はんとする需要を著しく左右す、即ち欲望の弾力性大なるものなり。

後の場合は價の下落より來る刺戟は購買の念を左右するこゝ僅なり、換言すれば欲望の弾力性小なる者なり。而して價の下落により伸縮するこゝ大なる需要は、價の騰貴により伸縮するこゝも亦大なり。此理は個人の需要に就ても市場に於ける需要に就ても溢るこゝなし。仍て需要の伸縮に關する一般法則は左の如く定義するこゝを得可し。

一市場に於ける需要は、價に於ける一定の下落に對し其の増加するこゝ多きもの弾力性大にして、少きもの小なり。價に於ける一定の騰貴の場合亦同じ。

こゝ。即ちマ氏は供給の多寡、欲望減少の度合との關係を價に於る下落(並に騰貴)の一現象のみに就て説明せんとするものなり。價に變化なくして需要に増減ある場合は、全く之を度外に置けり。然らば氏は此場合は毫も之を考究するを要せずや、爲すものなるや、云ふに然らず。氏は右に續て斯くの如き場合を論ずるこゝ、稍々詳なるこゝ後段紹介する所の如し。而してマ氏の右説明に於て予の取らざる所は、價の高低を先づ前掲して、需要の増減を後に置くこゝ是なり。蓋し需要の弾力性の大小は、其結果を見て始めて知るものなるは前に云へる如くなり、雖も弾力性其ものは價に高低ありて始めて生

ずるものにあらず。物體に弾力性あり、唯之に熱を加ふるにより伸ぶるこも多きものあり、少きものあるが如く、需要は其自らに弾力性を有す、唯價高低するこも、多く増減するあり、少く増減するものあるのみ。マ氏の論ずる所、稍々此理を誤解せしむるの嫌なきにあらず。故に予は需要伸縮の法則を左の如く云ひ改めんこ欲す。

弾力性大なる需要は價の騰落に對して其額著しく増減し、弾力性其の小なる需要は、少しく増減す

並に

弾力性小なる需要にありては、供給増加するも、支拂はんこする價下るこも少く、弾力性大なる需要にありては、供給増すこきは、支拂はんこする價は著しく下落す

或は又結果より推して原因に到達するの意を言表はさん爲めには、

價の騰落に對し著しく増減する需要は、弾力性大にして僅かに増減する需要は、弾力性小なり。

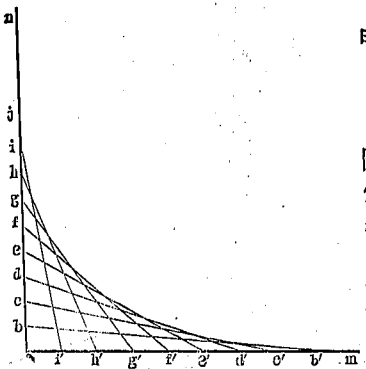
供給増加するも、支拂はんこする價格の下落するこも少き需要は、弾力性小にして、其下

落するこも著しき需要は、弾力性大なり。」

今以上の理を試に左に圖解す。

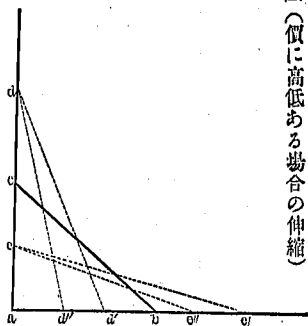
甲

圖(伸縮なき場合)



- (一) am 線上の長さは需要額、an 線上の高さは價格を示す
- (二) ab, ac, ad, ae, af, ag, ah, ai は箇々の財の價格を表はし
- (三) ab', ac', ad', ae', af', ag', ah', ai' は之に應ずる箇々の需要額を表はす
- (三) aj は所謂 prohibitive price 禁止的價格を示す、即ち am 線上に於ける需要額は零無となる

乙 圖 (價に高低ある場合の伸縮)



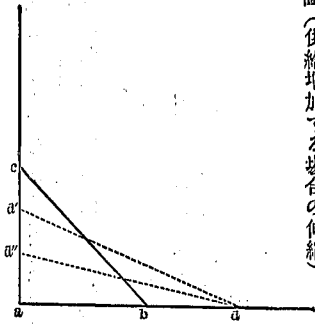
acの價のさきabの需要額ある物

(一) 其價adとなるさき需要額ad'となるもの其價aeとなるさき

aeとなるものは弾力性大なり

(二) adとなるさきad'となり、aeとなるさきae'となるものは、弾力性小なり

丙 圖 (供給増加する場合の伸縮)



abの供給あるさきacの價を支拂はんとするもの

其供給増してadとなる場合に支拂はんとする價

(一) ad'となるものは弾力性大なり

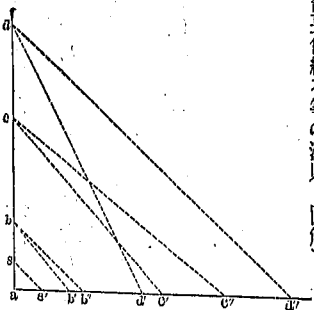
(二) ad''となるものは弾力性小なり

需要伸縮の一般法則は右の如し。然るに此の法則は亦他の法則に支配せらる。即ち高價なるものに對する需要ミ、廉價なるものに對する需要ミは、其の伸縮の度を同せざるこゝ是れなり。同一物にても、其の價高き時に於て、生ずる價格の變動に伴ふ需要の増減は、其價廉き時に於て、生ずる價格の變動に伴ふ需要の増減ミは異れり。此の法則は之れを名づけて『需要伸縮不等の法則』と云ふ。マ氏は此の法則の内容を左の如く説明せり。

需要の伸縮は高き價に對しては大なり。之れに次ぐ價に對しては大なるか、又は、少くも著し。低き價に對しては小なり。其の下落が飽實點に達するさきは伸縮なきに至る。

試みに圖解せば、

(需要伸縮不等の法則 圖解)



- (一) adなる高き價に對する需要伸縮の大ききはd'd'なり
- (二) acなる其次の價に對する需要伸縮の大ききはc'c'なり
- (三) abなる低き價に對する需要伸縮の大ききはb'b'なり
- (四) asなる飽實價に對する需要は弾力性を有せず常にas'なり。

然るに右に云ふ『高き價』『次なる價』『低き價』『飽實的價』は絶對的のものにあらずして相對的のものなり。即ち

- 一 人を異にするによりて其意異り
- 二 物を異にするによりて其意異る
- 一 人を異にする中最も著しき者は、貧者と富者との別是なり。マーシャル曰く、貧者に取て殆んど禁止的に高き價も、富者に取りては低き價たる可し。貧者は嘗て葡萄酒を

飲まず、富者は殆んど其價の高低如何を問はず飲まんご欲する丈けは飲む。其貧ご云ひ富ご云ふにも亦幾多の階段あり。故に此場合價の高低ご云ふは常に一定の社會階級の立場より見たることにして社會全般に於ける高低を云ふは意味を成さずご。

二 物を異にするごは、主ごして其物が容易に飽實せらる可き欲望の對象たるか、飽實の點に達するご違き欲望の對象たるかの差異を云ふ。マ氏曰く、或貨物は容易に人の欲望を飽實し、或貨物(主ごして體裁用に供せらるゝもの)に對する欲望は殆んど無限なり、後者に對する需要は價下るご甚しきも、猶其伸縮するご大なり、前者に對する需要は價低落するご殆んど全く其弾力性を失ふご。

マ氏は右の理を説明して次の如く云へり。貧者に對しても、猶ほ價低き物あり、例へば鹽香料廉價なる藥劑の如き是なり。是等の物其價下落するも、其消費高を増すと多からず。即ち其價低きが故に需要の伸縮殆んど之れなきなり。肉乳牛酪羊毛煙草外國産果實又は普通の醫療の如きは其價の騰落に従ひ、勞働階級及中等階級の下部の消費高増減するご著しご、雖も、富者は此等の物の價如何に下落するも、之に對する消費高を増すご

さ多からず。即ち此等の物の價は前者に取りては、稍々高き價なるが故に之に對する需要の伸縮著しく、富者に取りては、低き價なるが故に伸縮なきこと、貧者に於ける鹽に均しきなり。乍併世に富者の數は少く、貧者の數は多し、故に貧者富者均しく消費する價低き物にありては、貧者の消費額は無論富者の消費額よりも大なり。從て此種の物に對する需要は、一般に見るときは、弾力性甚大なり、近き頃迄英國に於ける砂糖は此種に屬し、其價社會大多數に取りては、稍々高き價なりしが故に、全體に於て砂糖に對する需要は著しく弾力性を有せり。然るに現今に於ては、砂糖の價大に低落して、大多數人民に取りても低き價となりしにより、其需要は伸縮すること殆んなきに至れり。但此場合競争品代用品の有無並に其價の變動如何によりて、右説く所は著しく影響せらるゝものなるを忘る可からず。其物のみにて見るときは、伸縮甚大なるが如きも、其實は代用品の爲めに地位を奪はれたるに基くこと屢あり。例へば珈琲の價騰貴するるとき、之に對する需要著しく減ずることありとせよ、此一事のみを見れば、珈琲に對する需要は甚弾力的なるが如くなり、雖も其實は珈琲の價高まる時は從來、飲まざりし茶を購て之に代へたるが爲なる事

ある可し。牛肉に對する豚肉、麥酒に對する酒、木綿に對する絹、牛酪に對するマルガリン、瓦斯に對する電氣等、類例を擧ぐれば甚多し。

又價稍高き奢侈品(高價なる果實、魚の如き)に對しては、中等階級の需要は甚弾力的にして、價下る時は著しく増加す。然るに上等階級も下等階級も之に對する需要は多く伸縮せず。蓋し上等階級に取りては、其價は低き價なるが爲め伸縮せず、下等階級に取りては、其價は高價に過ぎ、價下れば、之を購ふの力なきが故、其需要増すことなきが故なり。次に珍奇なる葡萄酒、季節以外の果實、名醫又は有名なる辯護士の招聘等は、其價甚高くして、富者にあらざれば、之を需要することなし。而して此種需要は時として甚だ著しく伸縮す。高價なる食料品は寧ろ體裁の爲めに求めらるゝものなれば、其需要は殆んき飽實の際限なし。

マ氏は次に生活必需品に對する需要を論ず。曰く、此場合は例外に屬す、小麥の價甚高きときは、甚だ低きときに於ては、需要は伸縮すること甚少し。但し此場合小麥は價如何に高くも猶食料として最廉のものにして、價甚低くても食料以外に用らるゝことなし。

前提しての事なり。四切パン一個六片のもの四片に下落したりて其需要は殆んぎ増すことなし。極端なる騰貴の場合には英國に於ては穀法廢止以後之あるを見ざる故之を例證し難し。雖も不作の年の經驗を綜合して供給の減少十分の一・二・三・四・五なるとき價は十分の三八・六二・八四・四五の比例にて騰貴するものと見て大過なからん。是れケレヒ 一・キングの創見にかゝる所と認めらるゝ所にして、通例此理を稱して、キング法則と云ふ。然れども、キングの著中之を見出さず却つて載せてダリナンの著にあり。Davenport Works, II, 117, p. 224. 而して之よりも大なる價の變動起ること亦稀ならず。然れども價格の變動之よりも猶大なるは必要品ならずとも、其性質上容易く用に堪へざるに至るものにして之に對する需要彈力的ならざる物に於て見る可し例ば魚の如し。今日甚價高きも二三日の後ば殆んぎ價なきに至る其價格の變動甚だ大なり。

高低とも種々の異なる價に於て觀察し得ること水の如きは少し。非常に高き價あり、全く價無きことあり。而して相應の價に於ては、水に對する需要は著しく伸縮す。然れども水に對する需要は極めて有限にして、一定時に於ては、全く飽實の點に達するものなり、從て其價無料に近づくに従ひ需要は全く彈力性を失ふ。鹽も亦水に似ること多し。

英國に於ては鹽の價甚廉なるが爲食用としての需要は殆んぎ伸縮することなし。反之印度の如き其價高き所にありては其需要は比較的に彈力的なり。

住居の價は著しく下落する場合は不景氣其他の事情により其土地を去る人多き時を除ては、殆んぎ之を見ず。社會の狀態健全にして進歩を妨ぐる事情なき所にありては住居に對する需要は常に大なる彈力性を有す。

衣服に就ては榮耀の爲めにするものにあらずして實用に供するものにおいて必要は飽實す。即ち其價低き時は需要は殆んぎ彈力性を有せず。

必要品ならずして品質精良なるものに對する需要は人の感情によりて左右せらるること甚大なり。人を異にするにより其嗜好異り、同一人にては時を異にし所を異にし包圍の狀態を異にすれば其趣味同じからず。是れ多くは感情の作用に依るなり。

終りにマ氏の論ずるは、使用の種類多きと少きとに従ひ、需要伸縮の作用亦異なることなり。曰く、一般に云へば多くの異りたる使用に供せられ得るもの、彈力性亦大なり。例へば水は先づ飲用に供し次に割烹用に供し洗濯の用に供す。水の供給乏しからず、而

も一分量を量りて買入るゝ場合にありて貧者も猶且其欲する丈け飲用するに差支を見ざる程其價低しとも割烹用には同一の水を二回使用し洗濯用には大に節約を加ふるこゝあらん。中等階級は割烹用に二回使用せざるも洗濯用には稍々使用量を節す可し。然るに水管にて水を供給し、メートルにて極めて低價を徴するに過ぎざるこゝは洗濯用にも惜氣なく使用するに至らん。一ヶ年些少の定額を課するこゝは、水は總ての使用に向て飽實點まで使用せらるべし。以上を反對に、

一 絶對的必要品

二 富者の奢侈品にして富者に取りては其價甚しく負擔を感ぜしめざるものに就ては、一般に云へば、需要は彈力性を有するこゝ甚だ少し。

以上説く所は何れも皆時間の上に経過なしの前提の上に立論せるものにして、時間の経過あるこゝは、需要伸縮の法則は甚だ異りたる作用を有す。何こなれば他の事情同一なりこの前提は、時を異にするこゝは到底之を維持するを得ず。人に於ても、物に於ても、皆其状態を變ずるが故に、同一需要も異りたる伸縮を爲し、同一物に對する彈力性の發

現亦區々たり。今其重なるものを舉れば、

一 時間経過するに従ひ貨幣の購買力變動す

二 景氣の好否異り、從て社會全體の總購買力變動す

三 一國の人口及富力異動す

四 習慣流行趣味に變遷を生ず

五 新なる代用品及競争品起る

六 短き時間なれば一時見合し得可き欲望も、長き時間に涉るこゝは然るを得ず、衣服其他長時に涉りて使用せらる可き物に於て殊に然り。

而して以上に加へて需要額及需要價格に關し精確の統計を得るの困難なるが爲め（多くは殆んき不可能なるが爲）伸縮作用を的確に知悉するこゝ容易ならず。又販賣の爲めの需要の増加、直接消費の爲めの需要の増加（即ち傳來的需要の増加、第一次的需要の増加）を判別するこゝ困難なり。蓋し統計に表はるゝものは多くは傳來的需要の増減なり。然るに第一次需要の増減は必ずしも此と合致せず、否關稅増徴に際しての

見越輸入消費税新設に際しての見越購入は、多くの場合には、營利的需要を増進せしむるも、第一次的需要は却て減少するを常とす。而して又品質の變ずるが爲め真相を誤ることあり、分量は減ずるも、より、良き品質の物需要せらるゝに至るときは、數字の上にては、其需要は減ずるが如く見ゆれども、其實増進せること屢々之あり。弱き支那茶の需要廢れて強き印度茶の之に代るが如きはなり。

以上マ氏の説く所克く要を得て、増減の要を見ず。セリグマンは需要弾力性極めて小なるものに

一 之れに對する需要の不變的性質を有するもの、即ち鹽の如き。

二 元來利用少きも、價甚だ廉なる爲め需要せらるゝものにして、價少く騰るときは全く需要なきもの、即ちマルガリンの如き。

の二種ありと云へり。マ氏の所論と對照するに益あり。詳しくは同氏原論(第三版二三七頁以下)を見よ。

第四章 補論

本章説く所需要伸縮の法則は説明法に用語こそ異れ、其内容に至ては、ゴッセン既に之を五十年の前に詳論せり。マーシアルに新案と見る可きは、弾力性(Elasticity)なる語を創めたること是れなり。ゴッセンの論は其書百三十三頁下段以降にあり。ゴッセン曰く

『以上の點より見て享樂(Genüsse)を分て

一 欲望(Bedürfnisse)

二 狹義の享樂(Genüsse im engeren Sinn)

の二に爲すの必要生ず。而して、各個人の欲望の範圍は、其所得増進するに従ひ、益々擴張する現象を説明するを要す。富人は日々飽實の點まで肉を食する事を欲望の一に

數へ貧者は祭日に炙肉一片を得ば喜ぶ。其理由は他なし。一物の價の變動はE（所得）が最高點又は最低點に達する限界の前後に於ける變動にP（勞働）が先ち、此變動によりて其限界を超越せざるによりて生ずる作用と正反對なり。Pが此限界より大なるときは購入に充てらるゝ額に變動起るべき價騰貴する物に就ては其額は小なり其他の物に就ては大きなる。Pが其變動以前に於て限界を示す數より小なるときは其作用反對なり。欲望とは價の騰貴に際し他の享樂物の消費の減少を強制する力ある享樂を云ひ其反對なるものを狭き意義にて享樂と云ふ。

前者の場合には其充足は或點までは絶對に要求せられ人の意志は爲めに束縛せられ後者の場合には價の騰貴は使用の節約を意味し又貨幣の節約を要するなり。』

ゴッセンの所論を普通の語に言ひ改め之に實例を加ふるときは即ちマーシアルの論となる。

本章參考書は

* * * * *

伊國學者バレット及パンタレオニ兩氏の著あり殊にパンタレオニはゴッセンを祖述して稍々要を得たり。

Pareto, *Manuale di economia politica*. 1904.—Cours d'économie politique. 1897.

Pantaleoni, *Principi di economia pura*. 1889. (Eng. translation: *Pure economics*. 1898.)

次では

Jevons, *Theory of political economy*. 1888 p. 45, p. 71.

Ausnitz und Lieben, *Untersuchungen über die Theorie des Preises*. 1889.

Brentano, *Entwicklung der Wertlehre*. 1908 S. 46, f.

を見る可し。

* * * * *

猶々氏は本章附録として消費統計論を載せたり。今略す。

第五章 限界利用均等の法則

物の限界利用は供給の増すに従ひ遞減するものなることは既に説けり。然るに茲に續て考究す可きは物の使用法唯一途にあらずして種々なる場合に於ける限界利用の問題是れなり。例へば米は之を以て

- 一 食用に充つ可く
- 二 酒を造る可く
- 三 菓子を作る可く
- 四 家畜を飼養するを得可し。今 一 食用に充つる場合に

供給	其限界利用	供給	其限界利用
一石	なるとき 十	二石	なるとき 九
三石	〃 八	四石	〃 七
五石	〃 六	六石	〃 五

七石	〃 四	八石	〃 三
九石	〃 二	十石	〃 一
十一石	〃 〇		

の割合に遞減し、二造酒用に充つるとき

供給	其限界利用	供給	其限界利用
一石	なるとき 七	二石	なるとき 六
三石	〃 五	四石	〃 四
五石	〃 三	六石	〃 二
七石	〃 一	八石	〃 〇

の割合に遞減し、三菓子を作るとき

供給	其限界利用	供給	其限界利用
一石	なるとき 五	二石	なるとき 四
三石	〃 三	四石	〃 二
五石	〃 一	六石	〃 〇

五石	〃 一	六石	〃 〇
----	-----	----	-----

の割合に遞減し、四 家畜を飼養するべき

供給	其限界利用	供給	其限界利用
一石	なるとき 三	二石	なるとき 二
三石	〃 一	四石	〃 〇

の割合に遞減するものと假定す。

此場合米五石あり其全部を食用に充つるべきは、限界利用は下りて六石なる可し。雖も四石を食用に充て、残る一石を酒造用に充つるべきは、其限界利用は上りて七石なる可し。米十石あり、其の全部を食用に充つるべきは、利用は下りて一石なり、造酒用に充つるべきは零石なる可きも、六石丈は食用に、三石を造酒用に、一石を菓子用に充つるべきは、其利用は昇りて五石なる可し。米十七石あり、全部を食用に充つるも、造酒用に充つるも、菓子用に充つるも、限界利用は共に零なる可けれど、食用に八石、造酒用に五石、菓子用に三石、家畜用に一石を充當するべきは、其限界利用は均しく三石なる可し。

斯くの如く用途種々ある物に就ては、使用法の異なるに従ひ、其限界利用異なること、實際上

多く見る所なり。而して利用遞減の法則に支配せらるる物にありては、供給の増加する結果として漸次利用の遞減するに従ひ、新なる使用法を喚起し、又興へられたる供給の分量に就ては之を各種の使用法に按排配當して全體に就て最大の限界利用を生ぜしめんと勉むるは、他に妨ぐる事情無き限り(尤も其事情は甚多く且屢々起る)原則として人の有意無意に期する所なり。之に背くものは物の使用法の選擇を誤れる浪費者冗費者たるの謗あるを免れず。マ氏は之を名けて『同一物の異なる使用法の選擇の理』と云ふ。即ち以上の假例に於て十七石の米を悉く食用に供するか、又は食用と造酒用とに折半して充當する者の如きは、經濟の道を失するものにして四個の使用に分當して其全體の上に於て最大の限界利用三を得るものは、其道を得たるものと云ふ。『限界利用均等の法則』を換へて云へば、幾種の異なる使用法ある物に就ては、原則として、人は皆其充當する各部分が均等なる限界使用を生ずるやう勉むるものなり。之を『限界利用均等の法則』と名けて差支なからん。マトシアルは此法則を定義して左の如く言へり。

『幾多の使用法に充つるを得る物を有する人は、凡てに於て同一の限界利用を有す可き

様に配當す。一の使用法が他の使用法より大なる限界利用を有するときは、其少き用法より移して、大なる用法に充つるを利す可ければなり』

此理はマ氏の創説に屬せず、埃國學派之を詳に説き、埃派の前ジエヴォンス之を論ぜり。而して埃派にもジエヴォンスにも先つ久しき以前、ゴッセン之を説て殆んど餘蘊なし。創案の名は確かにゴッセンに歸す可きものにして、他は皆之を祖述し、之を布演するのみ。即ちゴッセンは

『人は一生の享樂の合計が最大なる様に其行爲を定むるものなり』(前掲書第三頁)云ふを以て、根本原則を爲せること既に述べたるが如くにして、而て彼は、此の根本原則より論及して、斷案を下して曰く、

Wenn seine Kräfte nicht ausreichen, alle möglichen Genussmittel sich vollaus zu verschaffen, muss der Mensch sich ein jedes so weit verschaffen, dass die letzten Atome bei einem jeden nach für ihn gleichen Werth behalten. S. 33. Es folgt daraus: dass ihre Beschaffung in einem solchen Masse vorzunehmen ist, als die Production der nach dem Obigen als vernünftig erscheinenden Quantität der

Genussmittel es wünschenswerth erscheinen lässt. S. 34.

人は凡てのある限りの享樂資料を得るの力なきときは、其各箇の最終の原子が彼に向て均しき價值を保持する限りの點まで、各資料を得るを勉めざる可からず

……従て生ずる原則は、享樂資料の獲得は以上云ふ所に準じて合理的と認めらる可き分量を生産することを期する程度に於て行はる可きものなり

ゴッセンは更らに此理を布演して、各種の所得に就て數學的に細論せり。其最終の原子云ふは今日の通説に於て限界分と稱せらるゝものにして、最終原子の價值云ふは、即ち限界利用の事なり。限界利用均等の法則は、疑もなくゴッセンの認むる所なること以て知る可し。

予は米の例を以て之を説明せり。マ氏は婦女が羊毛を以て衣を作り、靴下を作る例を用ゐたり。然れども此例は Domestic production (家内の生産の例にして) Domestic consumption (家内消費の例に非ざる)こと、マ氏自ら脚註中に辯疏するが如し。吾人は茲に問題とするは、言ふ迄もなく、需要消費の問題にして、生産の問題にあらず。然れども限界利用均等の

法則は同じ前提の下には生産にも行はる。ゴツセンは享樂資料に就て云ふのみならず、生産に就ても云ふこと右第二段引照句の示す所の如し。マ氏に惜む可きは、引例の稍々妥當ならざるの點是れなり。利用均等を得可く、物の各種異なる使用間に選擇を行ひ得ること、流通經濟の發達し、貨幣經濟の普及せる現今の經濟生活に於て、又最も發達せり。自足經濟時代に於ては、自らの經濟内にて生産せる物のみに就いて選擇し得可きのみ、其數は限られ、其範圍は甚だ狭し。交換聊か起るに及んで、此範圍は稍擴張し、今日の世になりては、殆んど無限となり。故に自足經濟時代に於ては、ゴツセンの所謂人間一生の享樂を最大にし、今日の語にて所謂最大の限界利用を按排收得すること能はず、人間欲望の充足は甚だ限局せられあり。今日に於ては、自足時代と同一の所得を有する者が按排配當より得る限界利用の合計は甚だ大なり。即ち一定の欲望に對し、一定の物を充つるにしても、數多の使用間に選擇の餘地多く、又一欲望を充足するに數多の異なる物あるにより、按排の行はれ得る範圍大なり。是れ體て經濟生活進歩發展の最も大なる賜と云ふ可し。而して貨幣は、此選擇按排を最も正確に、最も合理的に行はれしむるに不可缺要素具た

り。蓋し限界利用は之を貨幣價值にて言表はすにより、始めて眞に比較秤量を爲し得るものにして、貨幣なくしては其選擇は、人の趣向により、時の状態により、甚だ複雑困難にして、或は全く不能なることなきに限らず。貨幣經濟存在の理由は、先づ此點に於て、有力なる根據を有するものと云はざるを得ず。貨幣經濟の世にありては、數多の物と物との間の選擇は勿論同一物の二の使用と他の使用との間の選擇、亦皆一定の貨幣額の充當に對する限界利用の秤量となりて實現せらる。即ち米十七石を何々の使用に按排す可きやの問題よりも、寧ろ貨幣(十七石の價を假定して)八百五十圓の配當の問題となる。八百五十圓中、例へば四百圓を食用に、二百五十圓を造酒用に、百五十圓を菓子用に、五十圓を家畜用に充當する可き、其限界利用凡てに均等ならんを勉む。而して物と物との間の選擇も斯くするによりて、貨幣なる同一物の異なる使用間の選擇に變形するに至る。即ち米麥豆の三者を如何に按排せば、其凡てより最大の限界利用を收得し得可きやの問題は、與へられたる貨幣額例へば百圓を使用するに、何圓を米に、何圓を麥に、何圓を豆を買ふに充つるを以て、百圓の最大限界利用を收め得るかの問題となりて現はる。米に費した

る五十圓は三の限界利用を有し、麥に費したる三十圓は三の限界利用を有し、豆に費したる二十圓は三の限界利用を有する。百圓の按排は其當を得たるものと認めらる。換言すれば、各支出が他の支出によりて得可き限界利用より少き限界利用を生ぜんとする點に於て其支出を轉じて他の支出に移すこと經濟の要に合ふものとせらる。他により多き限界利用を生ず可き用法あるに、猶同一の支出を繼續して改めざるものは、理財に拙なるものなり。絶へざる注意と巧なる選擇により、其費す一錢一厘も猶且つ與へられたる時、所々事情の下に於て、凡て同一の限界利用を生ずる様爲すものは、理財の道に達せるものなり。人の世に處し家に居る、其經濟上の行動は、他に妨ぐる事情なき限り、常に其費す所の限界利用の合計が最小にして得る所の限界利用が最大なるを期す可きものなり。家計の要財政の妙此を措て望む可からず。ゴッセンは之を以て人類處世の倫理上の法則の根柢たる可き常理なりと云へり。貯蓄(資本形成)の原理は、限界利用均等の法則より出で来る。家計豫算家計簿記は人が此法則に従はんが爲めの補助者たり、助言者たり指導者たるものなり。リーフマンは本書舊版刊行以後數年初めて此の理を力説

して學者の注意を惹けり。Robert Lieftmann, Theorie des Sparens und Kapitalbildung. Schmoller Jahrbuch Jahrg. 36 (1912) SS. 1665 ff.

限界利用均等は右説くが如く、一物と物との間の選擇按排、二同一物の異なる使用法に就ての選擇按排の外、猶三其充用の時の上に就ての配當ありて、其作用を全くするものなり。時の上に就ての配當を、マ氏は即時の使用と、繰延られたる使用との間の選擇と名く。即ち現在に於て使用するより生ずる限界利用が、將來に於て使用するより生ずる限界利用よりも大なりや、小なりや、將亦同一なりやは、決して一定せず、故に其間適當の按排によりて、時を異にする使用に就て、合計の限界利用最大にして、其各時に充當せられたる欲望充足が、凡てに於て均等なる限界利用を有す可き様に配分するは、經濟の本則の要求する所なり。然るに將來の使用の與ふる限界利用とは、將來の一定時に於ける限界利用を云ふにあらず。時を異にすれば、限界利用の秤量異なるが故に、嚴密に云へば、其使用の時に於ける現在の限界利用あるのみ、將來の使用の限界利用を現在の使用の限界利用と比較する標準なし、故に兩者の比較は不可能なる可き理なり。從て茲に云ふは將來の

使用の其將來の一定時に於ける限界利用にあらず、將來の一定時に於ける使用が現在に於て其人に對して有する限界利用の意ならざる可からず。換言すれば、現在の使用と將來の使用との選擇とは、現在其物を使用するより生ずる限界利用と將來に於て其物を使用するが爲め之を保藏確保することより生ずる限界利用とは、何れが大なるやの問題に就て選擇するの意に外ならず。百圓を有するもの其五十圓を以て即時に飲食の費に充つるべき其限界利用は十なり、其以上費すべきは利用は五に下ると假定せよ。残の五十圓を貯蓄して老後の安全を圖るに充つるべき其限界利用十なりとせよ。此の五十圓を直ちに使用するものは限界利用を得ること少きを以て満足せざる可からず。合計に於て最大の限界利用を得んには、残る五十圓は將來の用の爲めに積立て、其積立金の與ふる限界利用が現時の使用の與ふる限界利用と均しきを期す可きなり。然るに斯く將來の使用を現在の使用と比較秤量するには、二箇の條件の存するを記せざる可からずと、マ氏の説く所なり。二箇の條件とは

一 客觀的性質に基くものにして、人によりて異なることなきもの、即ち將來の使用の

現在の使用に比して不確實なること

二 主觀的性質に基くものにして、人を異にするによりて其性格其事情の如何により異なるもの、即ち將來の使用と現在の使用との各人に對する價値の差違

を云ふ。

將來の使用を與ふる利益が、現在に於ける同一の利益に均しき限界利用を有するものならば、物の按排は凡ての時に涉りて均一に行る可き筈なり。然るに事實に於ては、原則として將來の使用の與ふる便益が現在に於て有する價値は、現在の使用の與ふる便益の價値よりも少きを常とす。即ち將來の使用は現在の利用として秤量するには割引せらるゝを例とするものなり。此割引は現在を隔つる時の長きに從ひ増すものなり。而して其割引の割合は、人によりて同じからず、思慮深く將來に具ふるの念強き人は少く割引し、忍耐力乏しく先見の明なき者は多く割引す。『管越の錢を使はぬ』と云ふ人は、殆んど全額を割引するものにして、身を奉ずる極めて薄く、只管貯蓄を樂むものは、殆んど割引せざるものを見る可し。同一人に在りても、時所事情を異にするによりて、其割引の割合同

じからず。或時は多く割引し或時は少く割引す。但し此割引より控除す可きものあり他なし他日の使用を待つ樂の與ふる利用は是れなり。又必ずしも他日の使用を期するに非ずして、保藏其事貯蓄其物を樂み、之より多くの限界利用を受くる事あり。所謂『溜る程汚く』單に貯ふるのみにて、一生中之を使用するの望を持たず、又其機會無きに猶現在の使用を極度まで切詰めて自ら喜ぶものは必ずしも將來の樂しみを大なりとするものにあらず、現在に於ける保藏其ものが與ふる満足を甚大に秤量するものなり。此點左右の論文「貨幣概念を中心として」に於ける貨幣限界利用非認説に根本的の誤解あるが如し。又之阪西教授の「價格生活の理論」に於ける評論は少くも經濟理論としては正鵠を得たり。

唯に所持に依つて大なる満足を購入ひ得るものあり、土地の如きは地主たるが爲に、社會上の名譽多く、殊に選舉權の資格條件させらるゝ場合に於ては、之を使用するより生ずる以上の限界利用ありさせらる。利廻の點より云へば他に勝るものあるに拘はらず、利率低き事業の株券を購入するが如き其限界利用は、所持の與ふる餘分の限界利用あるが爲めと知る可し。一生中殆んご使用する機會なき家具書籍の類を蒐めて喜ぶもの、前後唯一回着用するに過ぎざるウエディングドレスに數百金を費して惜まざるもの、如き畢竟之

を所有すとの安心が其人に與ふる満足に多大の限界利用を見出すが爲なり。虛榮心強く、世間體をのみ顧慮する小人婦女の如きは、此種の満足に大なる限界利用を見出すこと到底物の實質をのみ見る男子の諒解し難き點にまで及ぶものなり。是れ所謂聲聞の欲望の最も強く働くが爲めにして、聲聞の慾寡なき者が、之を見て、無下に浪費なり冗費なりと斷ずるは、已あるを知て他あるを知らざるもの、稱す可きのみ。之を fictive value 『架空の價值』と稱するも中らず。架空なるもの、然らざるものとの區別は其標準を何處に求む可きや。されば限界利用均等の法則は、根本原則としては之を論ずる困難ならず、雖も實際生活に於て一々其の作用を立證せんこと容易の業に非るを知る可し。

將來の使用と現在の使用とを比較して、其取舍選擇を決定するに方りては、更らに猶一の困難なる事情あるを思はざる可からず。他なし。異なる時に於て享有する利益は、之を數量的に比較すること能はざることは是なり。前例に於て限界利用を示すに數量を以てしたるは假設に過ぎず、實際生活に於ては、如此事は到底成し得られず。蓋し即時の消費を繰延ぶるは其の實享樂其ものを繰延ぶるにあらず、現在の享樂を捨て、將來の享樂

を以て之に代ふるを云ふなり。換言すれば、繰延言ふは實は中らず將來を以て現在に換ふる一の轉置代位なり。將來の享樂其ものは、今廢する所の現在の享樂より必ずしも大なりと斷ず可からず。又小なりと斷ず可からず。此點は填國派の泰斗ボエム、パウエルクの利子論の大なる缺點とす可き所なり。蓋し氏は資本の利子を生ずるは現在の使用より將來の使用の方常に價値少きが故に其差違を補填す可く、元資に加ふるに利子を支拂ふを要するが爲なりと説く。例ば今百圓の金を貸付けて、一ヶ年後に其返濟を受くる場合ありとせよ。今直下に百圓を自己の消費に供するに代へて、一ヶ年の後此百圓を用ゆるときは其額は同じ百圓なれども、直下に用ゆる時より將來に用ゆる方價値少し。故に別に利子を添へて、一ヶ年を延したるが爲め減じたる百圓の價値を補ふを要すと説けり。是れ眞理の半面のみ現在の使用よりも將來の使用の方利用大なること屢々あり。僅に文字を解する者が、高尚なる書籍を讀たりて何の益なし、數年を経て、學進み智加はりて、之を讀む時は益すること大なり。年壯に收入多き時の百圓は、一ヶ月の生計の一小部に過ぎざるに、年老け收入少き時まで之を貯蓄し置きて後始めて之を使用する時は、或

は數ヶ月の生活を支ふるを得可し。

其反對の場合も亦必ず之れあり、年少收入少きとき生命保險に加入するもの其掛金の爲めに忍ぶ苦痛は

大なり。然るに收入多く、又物價騰貴せる老年に入りて、保險金の支拂を受く。將來の享樂其るは大なる限界利用を捨て、小なる限界利用を取るものに等じかる可し。ものが現在の享樂より小なるにあらざれば、將來の享樂が現在に於て有する限界利用が小なるなり。此二者同じきが如くにして其實甚異れり。其他猶考ふ可きことに、貨幣價値の變換延べて貯蓄し置き其價値高まるべき之を用ふる場合には將來の限界利用の方遙かに大なる可し。

されば將來に享く可き利益を割引す云ふも、其利益の數量的大きさを確定したる上にあらざれば其割引の歩合は之を知る可き能はず。マ氏は此點に於て二の推定を爲すに、より此歩合を略定するを得可しと云ふ。二の推定は、

- 一 其人が其將來に於ても現在に富有的度同一なりとすること
 - 二 一定の貨幣額にて表はさるゝ利益より得る其人の享樂の力變ぜざるものとすること
- ること(箇々の點に於ては増減ありとも妨げなし)

此二つの推定を許容し置きて、今一磅を貯蓄し置きて一ヶ年の後に一磅一志を得んことを欲する人ありとせよ。此人の將來を割引する歩合は(其將來は人間常命の上に於て確

實なるものと推定して、一ヶ年五分なりと云ふを得可し。是れ彼が將來を割引する歩合にして、而して金融市場に於ける割引歩合亦之によりて定まるものなり。

以上は一時限り使用せらるゝものに就てのみ説明したれども、長期に涉りて使用せらるゝものに就ても其理異ならず。即ち各箇々の使用の合計が、其物の存在する限りの全體の利用となるものにして、以上の理は、箇々の使用に就て正しきが如く、其合計に就ても亦正し。

マ氏が若論する所亦ゴッセンの夙に唱導せる所なり。ゴッセン曰く

Die Gegenstände der zweiten Klasse haben nur Werth, insofern sie in der bestimmten Vereinigung wie Genussmittel wirken, in ihrer Gesamtheit findet daher das über die Werthbestimmung der Genussmittel Gesagte unmittelbar Anwendung. S. 32.

第二類の物(長期使用せらるゝもの)は、一定の結合に於て享樂資料と同一の作用を有するによりて價值を有するのみ。故に其全體に就ても、箇々の享樂財に就て云へる理直ちに適用せらる。

マ。

猶時を隔てたる使用は、其時を隔つるにより利用遞減の法則の作用に異動を生ずることを注意するを要す。即時に使用するときは一定の遞減の率を有する二物を、或時期の後使用するときは、其利用遞減の割合同じからざるに至ることもあり、又其時期の長短に従ひ此割合に大小の差違を生ずることあり。

以上各種の異同作用ありて法則の發動を妨碍すること甚多きが如くなり、雖も、人時所事情を同ふするときは、原則として、人の欲望充足は常に均等なる限界利用を總ての部分に於て得んことに趨向すること、水の水平を求むるが如くなるに渝ることなし。限界利用均等の法則は、自然傾向の體現なると共に、また目的論的立場より見たる一の倫理法則なること、誠にゴッセンの言の如くなり。

第五章 補論

近來我邦に勤儉貯蓄論流行し、之を倫理學的に立論せんとするもの少しとせず。而も經濟學の立場より、學術的に之を講究するものは稀なり。故に本章は稍々贅言を此點に就て撰したり。讀者之を諒せよ。

ブレンタノ先生曰く

Kapital ansammeln ist ein mittelbares, aber kein zukünftiges Bedürfnis. Kapital anzusammeln wird in der Gegenwart als Bedürfnis empfunden um eines Vorteils willen, der allerdings erst in der Zukunft zur Reife gelangt, dessen Sicherung für die Zukunft aber in der Gegenwart bereits Lust be- reitet. S. 10.

資本を蓄積するは間接的の欲望たるには、相違なければ、之を目して將來の欲望とするは中らず。資本を蓄積するより生ずる利益は無論將來に於て圓熟するものなれども、之を將來に向つて確保する事其自らが現在に於て人に快感を與ふるが爲め、現在に於て一

の欲望として感ぜらるゝものなり(欲望論第十頁)

即ち嚴密に云ふときは、限界利用の比較選擇には、將來を云ふことなし、常に與へられたる人に對し、與へられたる物の與へられたる使用が、與へられたる一定時に於て有する限界利用が觀照せられ得るのみ。故に時間の差違は、欲望充足の方法に關する第二次的條件のみ。其問題となる第一次的の欲望は皆現在に於けるものならざる可からず。ボエムバヴェルクが單に時間の差のみを以て資本を説明し、利子存在の理由を論證せんとするは、此點よりのみ見ても、到底服従し難き議論なり。

時の差違を以て重大なる要件として、欲望充足に別を立つる以上は、其他の差違即ち人を異にし、事情を異にし、購買力を異にし、所を異にするより起る總ての差違は、亦皆之を要件として、細目を立つるを要す。而も斯くするは、議論を錯綜せしむるのみにて、利する所少し。

時の差違を以て、價値の差違を説かんを試みたるは、ボエムバヴェルクに始れるにあら

ず。彼以前既に幾多の學者之を論ずるものあり殊に『スコラ』哲學の泰斗トマス・ダキ
ノ之を論じて甚精到なることは予之を『トマス・ダキノ經濟學說』に於て示したり。
經濟學研究五七一頁 至七一一頁を見よ。ポエム・バヴェルクが『現在の財は、原則として、同種同数の將來の
財より價值多し。此原則は予が利子論の極意にして中心點たるものなり』と言へるは、
本文云へる如く謬説たるのみならず、亦た以つて前人の功業を没するの嫌ひあり。バヴ
ェルクは前人中獨りアダム・スミスが『現在の享樂と將來の利益』(present enjoyment and
future profit)を論ずる條を引用せり。此句バ氏引用の國富論第一卷第一章になし。其の
章に於てはアダム・スミスは流通固定兩資本の別を論じ流通資本は財を作り、又は買ひ
て賣るに用ゆる資本にして、所有主の手に存し又は形を變ぜざるべきは利益を生ぜざる
ものなりと云ひ、固定資本は其の形を變ぜずして利益を生ずるものを云ふと説けるのみ。
而して

No fixed capital can yield any revenue but by means of a circulating capital (Edition Cannan I.
p. 266).

固定資本は流通資本の助あるにあらざれば利益を生ぜず

と云ひて、マルクスの不變資本は價值を増さず、可變資本あるによりて餘剩價值を生ずと
云へる思想の先驅を爲せる一節を載せたり。バ氏の云ふ所は此章に見當らず。恐らく
引照に誤あるならん。

其は扱置き、時間論を試みしもの、バ氏の前にジェヴォンズあり、シーニオあり、ミルあ
り、否ミルの引照せるレあり。(ミル曰く資本蓄積の問題に付ては、予自らの論を述べん
より、既に先人之を論じて餘蘊なきものあり。即ち餘り世に知られざるドクトル・レーの
經濟學新論是なり。著讀は凡て、將來の利益の爲めに、現在の利益を捨つることを云ふ。
而して將來を現在と比較秤量するに方り最重要の要素は、其不確實なること是なり。然
るに不確實の度は決して均一ならず云々。(原論一卷十一章二節の始)

バ氏と時を同ふするものに、ザツクスあり、メンガーあり、唯時間を以て利子を立論する
唯一の根據とせしめるは、獨りバ氏あるのみ。而して此は眞理の全部にあらざるのみならず、
將來の財なる概念は全然誤謬なり。バ氏に残る所甚だ多からずと云ふ可し。

本章参考書は既に掲げたるラッセンシユオンスブレントノの外

Böhm-Bawerk, Kapital und Kapitalzins 2. A. Innsbruck. 1900. 1902. 3. A. 1909. 4. A. 1921.

Menger, Grundsätze der Volkswirtschaftslehre. Wien. 1871. 2. A. Leipzig. 1923.

Patten, Theory of dynamic economics. Philadelphia. 1892.

Rae, Sociological Theory of Capital, being a complete reprint of "the new principles of political economy, 1834." Edited by Mixer. New York 1906.

Sax, Grundlegung der theoretischen Staatwirtschaft. 1887.

Launhardt, Mathematische Begründung d.r Volkswirtschaftslehre. 1885.

等に散見する所を参考す可し。

第六章 価格と利用

物を生産し購入する何れも之によりて利用を増進せんが爲めなり即ち物を生産するは之が爲に費す總ての勞費即ち生産費よりも生産の結果たる生産物の方利用多きが爲なる如く物を購入するは代價を以て支拂ふ所よりも購入して得る物の方利用多きが爲なり。而して多くの場合に於ては物の價格は其最高利用の點まで遷することなく已むを得ざる場合には此點までは支拂ふを辭せずと認むる價を支拂ふ場合は稀にして大抵は其以下の價格を以て購ひ得るものなり。今支拂はんとする最高の價格を實際支拂ふ價格との差額を稱してマーシアルは『消費者餘剰』と名く。氏曰く消費者餘剰は購買によりて得る『餘分の満足』を代表するものなりと。

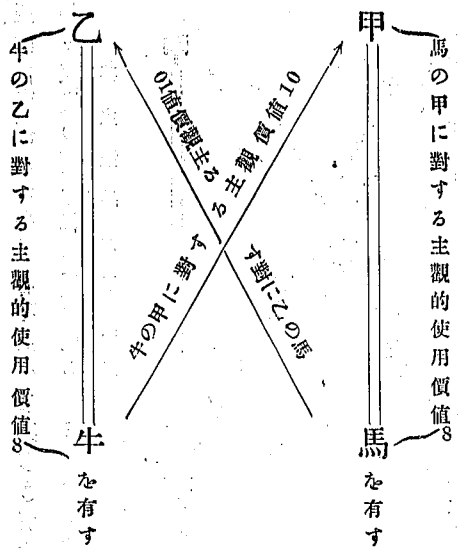
此の餘剰の高は物によりて同一ならず。或物は支拂はんとする最高價格に比し實際

支拂ふ價格甚低く從て其與ふる消費者餘剩甚大なり。例へば隣寸鹽新聞紙郵便切手の如きは之なければ不便を感ずること甚しきが故其供給少き場合には餘程の高價を支拂ひても猶ほ買はん可き物なれども實際賣買せらるゝ其價格は甚だ低きが故購買者は之を購ふにより甚だ大なる消費者餘剩を得るものなり。

マ氏は本章に於て此『消費者餘剩』なる概念を鎖鑰として價格と利用との關係を解明す可しと爲せり。然れども予は氏の『消費者餘剩』論に服し能はざること既に久しく、思索を重ねる數年、今日に至て猶其説を改む可き所以を見ず。消費者に餘分の満足あれば、生産者にも亦是ある可き理なり。而して是は交換論に於て詳説す可き性質のものにして、今需要欲望を論ずる編中に入る可き者にあらず。然れどもマ氏既に此論を茲に試むる以上、予も亦一應自説を陳述するの要あるを感ず。

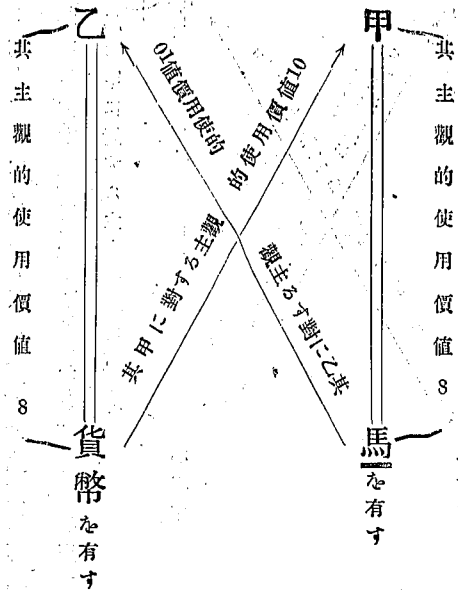
生産も交換も賣買も皆餘剩價値の發生を目的とす、之によりて價値の新たに發生し若くは既存價値の増進することなくんば、生産も交換も賣買も行はるゝものにあらず。十の生産費を費して十二の新生産物を得、十の物を與へて十二の物を交換し得ればこそ、生

産も交換も成立するなれ。而して其兩者の比較は客觀的交換價値に基くものにあらずして主觀的なる使用價値に基くものなり。今圖を以て此理を説かんに、



甲は己に對し8の主觀的使用價値を有する馬を乙に與へ、己に對して10の主觀的使用價値を有する牛を得るが故に、此交換によりて2の餘剩價値を得。

乙は己に對し8の主觀的使用價值を有する牛を甲に與へ己に對して10の主觀的使用價值を有する馬を得るが故に、此交換によりて2の餘剩價值を得るなり。即ち甲乙兩者共に主觀的使用價值の少き者を與へて其多き者を得るが故に、此交換は成立するなり。今此物々交換の例を代へて、賣買の例を爲すも其理異るとなし。次圖を以て説明せん。



百圓を以つて馬一頭を賣るものは其の時其の所其の場合に於いては、百圓の貨幣の方其の馬一頭より價值 (マ氏の利用) 多しとするが故にして、之れを買ふものは支拂ふ百圓の貨幣よりも其の一頭の馬の方の價值 (マ氏の利用) 多しとするが故のみ。即ち餘分の満足を得るものは獨り買手のみならず賣手も亦た同じく餘剩の價值を得るものなり。されば若し『消費者餘剩』なるものありせば、『生産者餘剩』なるものも亦たなかる可からざる理なり。然るに、マ氏は其の一方のみを説て他方に及ばず、理然る可からず。

何故にマ氏は此嗜易き道理を看過せしや其故他なし氏は此編に於て需要即ち消費者を論ずるのみにして、生産論を爲さず。故に『消費者餘剩』のみを説くなり。されば氏が立論の結構は妥當を缺くものにして此種問題は之を一括して價值論下に説く可きを僅かに其半面を茲に捉へ來れるが故に其論不備たるを免れざるなり。然らば何故氏は斯くの如き早計に陥れりや云ふに前に述べたる如く氏は先づ價格を前提し之れに對向して需要の現象を説くに止め直ちに需要其の物に肉薄して論究するを爲さざるが爲

なり。

換言すれば結果たる價格を却て原因の地位に置くものなり。予は斷じて此法を取る能はず。然れども氏に於て斯く構論する以上暫く氏に従て以下其論ずる所を尋ねざる可からず。

需要の強弱は支拂價格によりて數的に言表はさる。百圓を支拂ふと十圓を支拂ふとは其の支拂者の需要に百と十との比例差違あるが爲めなりとは、マ氏の常に推定する所なり。

然るに實際支拂ふ價格は此意味に於て需要者需要の強弱に比例せず。或物に對して百の需要力あり乍ら僅かに十の價を拂ふて足ることあり或物に對しては五十の需要力あるに止るに二十の價を拂ふを要することあり。即ち支拂價格と最高需要價格との關係は常に一定せずして種々異なる比例に立つものなり。故にマ氏の前提は破壊せられざる能はず即ち特に此一章を設けて其比例差違の理を究めて前提の維持を圖らんとするが氏の眞意なり。

氏は此理を尋究するに先づ假例を設けて其大要を述べたり。

茶一斤價二十志なるときは一ヶ年一斤を買はんとす 茶一斤價十四志なるときは一ヶ年二斤を買はんとす

茶一斤價十志なるときは一ヶ年三斤を買はんとす 茶一斤價六志なるときは一ヶ年四斤を買はんとす

茶一斤價四志なるときは一ヶ年五斤を買はんとす 茶一斤價三志なるときは一ヶ年六斤を買はんとす

茶一斤價二志なる現在に於て一ヶ年七斤を買ふ

ものと假定せよ。此場合に於て生ずる餘剰は幾干なりや。

一斤二十志なるときに於て一斤を買ふてふ事實は其一斤の與ふる満足は、他物を買ふに費す二十志が與ふる満足と全然同一なることを明示す。而して

價 十四志に下落するに猶一斤のみを購ふに止むるときは、二十志拂はんとするものを十四志にて購ひ得るものなるが故其得る餘剰は

20 - 14 = 6

六志に相當するものなり。即ち此場合の餘剰價值は貨幣額六志を以て言表はされ得るものなり。

然るに右の假例により

價 十四志に下落するときは二斤を買ふ

ものなるが故此第二斤は少くとも十四志の利用ありと認めらるゝものならざる可からず。即ち十四志なる貨幣價值は第一斤に附加して買入るゝ第二斤が彼に與ふる餘分の利用を顯はすものなり。即ち

$$\begin{array}{l} \text{第一斤} \quad \text{第二斤} \\ \text{の利用} \quad \text{の利用} \\ 20 + 14 = 34 \end{array}$$

合計二斤の茶は彼に對して合計三十四志てふ貨幣價值を以て言表はさるゝ利用を有すと認めらるゝものなり。然るに其支拂ふ價は毎斤十四志なるにより

$$14 \times 2 = 28$$

二斤に對し二十八志に止る。依て得る餘剰は前と同じく少くとも

$$34 - 28 = 6$$

六志なるべし。

次に價十志に下落する場合には、十四志の場合の如く二斤丈けを買ふに止むるを得可し。然るときは十志の二倍の價

$$10 \times 2 = 20$$

二十志を以て少くとも三十四志の利用ありと認むる茶二斤を買ひ得るものなるが故に

$$34 - 20 = 14$$

十四志の餘剰を生ず。然るに右例にては價十志の時は三斤を買ふ。依て

第一斤 の利用	第二斤 の利用	第三斤 の利用	
20	+	14	+
		10	=
		44	

三斤合計にて少くとも四十四志の利用あるものを

$$10 \times 3 = 30$$

三十志にて購ひ得るが故

$$44 - 30 = 14$$

少くとも十四志の餘剰を得ること第二の場合に異ならず。以下凡て之に準ず。

一斤の價下落して二志をなすときは合計七斤を買ふものなれば其七斤全體の利
用は

$$\begin{array}{l} \text{第一斤} \quad \text{第二斤} \quad \text{第三斤} \quad \text{第四斤} \quad \text{第五斤} \quad \text{第六斤} \quad \text{第七斤} \\ 20 + 14 + 10 + 6 + 4 + 3 + 2 = 59 \end{array}$$

五十九志なり而して支拂ふ價は

$$2 \times 7 = 14$$

七斤に對し十四志なり。依て

$$59 - 14 = 45$$

餘剰の總計四十五志なる。此四十五志は茶一斤の價二志てふ市場の事情の爲に購買者(需要者)が享得する所の餘分の満足なり。他物を購ふ可きか茶を購ふ可きかを決定する標準は此の餘剰を得ること何れの場合多きかに存す。マ氏は之を名けて『市場事情 Conjecture 亦り享くる消費者の利益』と稱す。

以上は個人の需要に就て觀察する所なれども更らに進んで市場需要に就て見るも其

理異なることなし。但し此場合貨幣の限界利用の人によりて異なることを度外に置くを要す。然らざれば多くの異なる人より成る市場に於ける價格は、又甚だ異りたる作用を生じて到底一貫の説明を下し能はざればなり。其外人々の趣向の差違貧富の差違等も亦其作用を複雑ならしむる原因なり。然れども汎く一市場又は一都會を見るときは大抵は如此個々の小異は大同の爲めに包含せられ、區々の差違は相殺して原則として同一の變動は同一の作用を生じ、一人の享くる餘剰は他の凡ての人の享くる餘剰と大略均等なるものと見て差支へなく、從て此問題を一般市場に就て研究するは學理上甚だ有益にして趣味深き事たるなり。

但し茲に注意す可きは、二物の總利用は其二物別々の總利用の合計に同じからざることをなり。茶と鹽とを合せて一圓丈け買ふ場合の總利用は茶七十錢のみを買ひ鹽三十錢のみを買ふ二の場合の總利用を合計したるものに同じからざるが如き是なり。

次に特言を要するは、或人が物を買ひて貨幣を費すこと愈々多きに從ひ其人の購買力は愈々減じ從て貨幣の限界利用愈々大なるの理と右説く所の餘剰との關係是なり。

此理は常に働きて其作用を已むることなし。雖も大體に就て見るべきは此は凡ての場合に同様に働くものなるが故に價格と利用との差額たる餘剩價值は購買力の増減並に貨幣の限界利用の多少の爲めに左右せらるゝことなし。見て大過なく常に同一比例を保つものも推定するを得。但し此にも例外の場合なきに非ず。即ちギッフェンの説きたる如く、パンの價の騰貴は時として却て其需要を増加せしむるの力あることはなり。パンは必要品にして其價騰貴するときは他の食料品に費やす可き餘裕減ず。然るに價如何に高くともパンは食料として最廉價品なり。故に他の食料を買ふ能はざるべきはパンをより多く食して其不足を補ふの要あり。即ちパンに對する需要は其價の騰貴によりて却て増進するなり。然れども如斯は稀有の事に屬するが故原則としては之を度外に置きて差支なきなり。

統計學者ベルヌーキは所得より享くる満足は生活を支ふるに足るだけを得るべきより始まり以上所得を増す毎に遞増し、以下之を減ずる毎に遞減するものを見る可しと論ぜり。

以下マ氏が四五六の三節に於て論ずる所は本章の主題に直接の關係なき消費論に關する常識談にして何等純理上の價值あるを見ず。依て省略す。

右マ氏の論ずる餘剩論は慥かに眞理の一面を傳へたるものにして、マルクスの餘剩價值論と對照して之を察するときは興味深き種々の問題を暗示す。然れどもマ氏の論じたる所丈けにては論旨寧ろ淺膚に失し、ニコルソンをして「百磅の所得の利用は千磅なり」と云ふ何の益かある』同氏原論第二版(一九〇二年刊)五十八頁と評せしむるに至れり。茶一斤二志なるに若し一斤百磅にて買はんとする人ありせば其の餘剩は莫大なる可し。雖も如此は實際に寸益なき空談に外ならず故にマ氏は如此設例は實際市價と餘り懸隔せざる假定價格に就てのみ意味を有し、之れを離るゝこと遠ければ全く架空的 conjectural たるに過ぎずと自白せり。即ち此の問題は需要消費の側より研究するよりも實際生活に起る買入に就いて其の市價と價值との關係を研究するところに於いて精査するを要するものなり。

第六章 補論

本章の問題は本文に述べたる如く流通經濟論に於いて詳論するを要するものなり。故に今補論せず。

第四編 生産の働因（供給論）

土地・労働・資本及企業

第一章 緒論

第三編に於て需要論の問題として欲望及其充足を論じて從來經濟學に於て『消費論』と稱するものに該當する研究を終りたり。されば之に續て供給論を試む可き筈なり。マシーアルは第一二版に於ては第四編を名けて『供給論即ち生産論』となし第一章緒論に於て供給に關する總論を載せたり。然るに第五版以降に於ては第四編は、『生産働因即ち土地労働資本及組織』と改題し第一章に於ける研究總論の順序を變更せり。是予が前編首章に於て指摘したる如く、マ氏が年所を経るに従ひ説を改めて、反つて通説の四分法（生産交換分配消費）に跡戻したるものにして、予が氏の爲に惜みて措かざる所なり。遯英第二章より第十三章に至る其内容に就て之を見る時は、氏の變化は寧ろ言辭